

新羅東北境における 新羅と渤海との交渉に関する覚書

赤羽目匡由¹⁾

目 次

- I. はじめに
- II. 統一新羅の東北境開拓と泉井(井泉)郡の位置
- III. 新羅東北境における新羅と渤海との交渉
- IV. おわりに

I. はじめに

新羅と渤海との外交関係について記す史料は極めて少ない。両国家間の使節の交換について年代順に見ると、第一に『東文選』巻33表箋所収の崔致遠「謝不許北國居上表」²⁾は、渤海建國當初その初代王大祚榮(位698～719年)が新羅に救援を求め、これに對し新羅王が「大阿曇」(新羅17等官位の第5等)を授けたことを伝える。第二に『三國史記』新羅本紀からは、元聖王6(790)年と憲德王4(812)年とに新羅が渤海へ使節を派遣した2例が知られる。第三に『契丹國志』巻1太祖は、渤海末の大諲譔(位906頃～926年)が契丹を恐れ、密かに新羅と同盟を結んだという。これら三つの事例のうち第一の事例は、渤海に對する新羅の優位を唐に主張する文脈で登場する事柄なので信憑性に若干疑問が残る。また第三の事例からは、使節交換の實相をうかがいがたい。しかし第二の事例については史實と認めてよいであろう。これら記事の伝える交渉がなされた各おのの國家の事情については、韓圭哲氏の精細な分析³⁾があり参考となる。

1) 日本學術振興會特別研究員PD

2) 『東人之文四六』(『高麗名賢集』5、成均館大學校大東文化研究院、1980年)巻1・事大表狀にも所収。

3) 韓圭哲「渤海의 對外關係史」(新書苑、1994年)第2章。

このほか兩國の直接的な接觸として、732年の渤海の登州入寇に始まり735年頃に收拾した唐渤紛争⁴⁾における新羅の参戦や、大仁秀(位818~830年)の新羅侵攻⁵⁾などが挙げられ、間接的には、9世紀末の新羅と渤海との争長事件⁶⁾に著名なように、唐廷における兩國使節の接觸が挙げられる。

ところで以上の諸事例は、國家間の、いわば非日常的な交渉・接觸といえよう。しかしいっぽう新羅と渤海とは、およそ8世紀初頭から10世紀前半にわたる長期間、互いに境を接していた。こうした恒常辯惑接觸のなかで、両者はどのような関係をもっていたのであろうか。

そこで小稿では、まず特に泉井(井泉)郡の位置を中心として新羅東北境の地理を確認し、次に当該地域における新羅と渤海との交渉のありかたを考察することで、この問題に接近したいと思う。

II. 統一新羅の東北境開拓と泉井(井泉)郡の位置

新羅と渤海との境界について、朝鮮半島西北方面(大同江(湍江)以北、鴨綠江以南)で境を接していたように述べる論考もある。しかし、『新唐書』卷43下・志33下・地理7下・羅摩州條末尾の所謂賈耽「道里記」の「登州海行入高麗渤海道」は、泊汭口(靈江と鴨綠江との合流點)から大同江の南までを唐領とする(地圖2参照)。当該記事は、私見では8世紀中葉⁷⁾遅くとも9世紀初めの事情を伝える⁸⁾。周知のように、その後も新羅領は大同江を越えず、また新羅末高麗初に平壤が久しく荒廢していたというので、新羅、渤海ともに朝鮮半島西北方面を領域化しなかったとみられる⁹⁾。兩國は朝鮮半島東北方で境を接していたのであった。

4) 唐渤紛争については、末松保和「郡縣制完成期の問題點」(『新羅の政治と社會』下、吉川弘文館、1995年)、古畑徹a「大田藝の亡命年時について」(『集刊東洋學』51、1984年)、同b「日渤交渉開始期の東アジア情勢」(『朝鮮史研究會論文集』23、1988年)、同c「唐渤紛争の展開と國際情勢」(『集刊東洋學』55、1988年)、同d「張九齡作『勅渤海王大武藝書』と唐渤紛争の終結」(『東北大學東洋史論集』3、1988年)、同e「張九齡作『勅渤海王大武藝書』第一首の作成年時について」(『集刊東洋學』85、1988年)、石井正敏「對日本外交開始前後の渤海情勢」(『日本渤海關係史の研究』吉川弘文館、2001年)等参照。

5) 『遼史』卷38・地理志2・東京道・東京遼陽府に、遼縣。本漢平郭縣地、渤海改為長寧縣。唐元和中、渤海王大仁秀、南定新羅、北略諸部、開置郡邑、遼定今名。戶一千。とある。

6) 濱田耕策「唐朝における渤海と新羅の争長事件」(『新羅國史の研究』吉川弘文館、2002年)。

7) 拙稿「八世紀中葉における新羅と渤海との通交關係」(『古代文化』58-5、2004年)31~39頁。

8) 松井等「渤海國の疆域」(『滿洲歴史地理』第1巻、丸善、1940年)425~426頁。

9) 『三國史記』卷50・列傳10・弓裔、「高麗史」卷1・世家1・太祖1、及び田中俊明「渤海建國初期の對新羅關係」(『北方史論叢』10、2008年)69頁。

そこで、まず統一新羅の東北境を確認しておこう。第一に、新羅の東北端の邑は、次の記事により泉井郡とされる。

(a)「三國史記」卷37・雜志6・地理4

賈耽古今郡國志云。「渤海國南海・鴨綠E扶餘・柵城四府。竝是高句麗舊地也。自新羅泉井郡至柵城府。凡三十九驛」。

(a)は渤海柵城府（東京龍原府。吉林省琿春八連城¹⁰⁾ 河上洋「渤海の交通路と五京」(「史林」72-6, 1989年)。以下、渤海の五京の地理比定については本論文を参照。)から新羅泉井郡まで39驛が置かれていたことを伝える。柵城府、泉井郡ともに日本海側に位置する(泉井郡の位置については後述)ので、渤海から新羅に入って最初の邑の泉井郡は、新羅東北端とされるわけである。

第二に、その泉井郡の位置については、二つの意見がある。まずは史料に従い、現在の咸鏡南道德源(朝鮮民主主義人民共和國(以下、共和國)では江原道元山市の北部)とするのが一般的である(以下、本節の記述の理解にあたり、地圖1を併せて参照)。すなわち泉井郡は、「三國史記」卷35・雜志4・地理2・朔州に、

(b)泉郡。本高句麗泉井郡。文武王二十一年(681)年、取之。景德王、改名。築炭項關門。今湧州。領縣三。(以下、引用史料中の()内は筆者の註、【】内は割註)

とあり、「今」即ち「三國史記」編纂時(1145年)の湧州にあたるという。湧州は、「高麗史」卷58・志12・地理3・東界に、

(c)宜州。本高句麗泉井郡【一云、於乙貢】。新羅文武王二十一年、取之。改爲井泉郡。高麗初、稱湧州。成宗十四年、置防禦使。後更今名。睿宗三年、築城。別號東牟【成廟所定】。又號宜春・宜城。要害處有鐵關。海島有竹島。

とあり、後に宜州と改名された。その宜州は「新增東國輿地勝覽」卷49・咸鏡道・德源郡護府・建置沿革に、

(d)(前略)。高麗時、稱湧州。成宗十四年、置防禦使。後改宜州。睿宗三年、築城。本朝太宗十三年、例改宜川。世宗十九年、改今名爲郡。二十七年、以穆・翼・度・桓四代御郷、陞爲郡護府。

とあり、後ち朝鮮時代に宜川郡¹¹⁾、德源郡護府となったという。

かし一方、池内宏氏は泉井郡を咸鏡南道永興(共和國では金野郡)とする¹²⁾。新羅北境に築かれた長城、及び新羅と渤海との境界に関する詳細な検討を通じ、前者を龍興江(金野江)と金津川(金津江)との分水山脈にある永興郡の古長城に比定し、後者については「新唐書」渤海傳が兩國の境とする「泥河」を金津川とする。また(b)の湧州を和州(永興)の誤りと

10) 河上洋「渤海の交通路と五京」(「史林」72-6, 1989年)。以下、渤海の五京の地理比定については本論文を参照。

11) 「世宗實錄地理志」卷155・地理志・咸鏡道・宜川郡。

12) 池内宏「眞興王の戊子巡境碑と新羅の東北境」(「滿鮮史研究」上世第2冊、吉川弘文館、1980年) 69頁。

する¹³⁾。

筆者は先に、泉井郡を永興とする見解に従って新羅東北境情勢を考察した¹⁴⁾。それは第一に、湧州を宜州、宜州を徳源とする(c)・(d)の所傳に疑問を抱いたためであり、第二に、池内氏の考證が極めて精緻で、大筋では従うべきだと考えたからである。しかしその際、説明なく湧州=徳源説を退け、池内説を採用した。また、池内氏が(b)の湧州を和州の誤りとする点には、無理があると思われる。

そこで以下、湧州を徳源とする所傳の當否と泉井郡の位置との二點について、筆者なりに改めて考えてみたいと思う。

第一に、湧州を徳源とする所傳の當否を考えよう。湧州を徳源とする所傳を疑う理由は、湧州と宜州とが各おの同時期に實在したとみられるためである。(b)の「今湧州」という註記は、「三國史記」が撰進された仁宗23(1145)年頃當時の湧州の實在を伝える記事とみられるが、いっぽう宜州については次の築城記事が伝えられる。

(e)「高麗史」卷12・世家12・睿宗1

(睿宗三年三月)尹璫、又築宜州・通泰・平戎三城。徙南界民、以實新築九城。

(f)「高麗史」卷82・志36・兵2・城堡

(顯宗)七年、城宜州。六百五十二間、門五。

睿宗3年は西暦1108年、顯宗7年は1016年に当たる。1145年以前の宜州に関しては、(e)と同様、1108年の宜州築城を伝える記事が他に「高麗史」地理志・東界條、同・兵志・城堡條、同・尹璫傳にみえ¹⁵⁾、いずれも宜州を九城、即ち尹璫が咸興方面の女眞を討伐して築いた九城の一つとする。宜州を尹璫九城の一つに数えるのは、1108年の宜州築城と尹璫の女眞討伐とが同時期であることから生じた、閔漬「本朝編年綱目」(1317年撰進)にはすでに確認される誤傳である¹⁶⁾。しかし築城の事實自体は否定できないであろう。また(f)は宜州築城を1016年とする。これは一見(e)と矛盾するようである。しかし他にも高宗8(1221)年または同9年における宜州築城が伝えられ¹⁷⁾、從來これは1016年の宜州創築に對する修築と見られてきた¹⁸⁾。(e)も高宗代の宜州築城記事と同様、修築とみなすことがで

13) 同上、69~72頁。

14) 拙稿「新羅末高麗初における東北境外の黒水・鐵勒・達姑の諸族」(「朝鮮學報」197、2005)。

15) なお宜州については、「高麗史」卷80・志80・食貨3、祿俸・外官にも「仁宗朝定」として宜州副使の祿俸規定がみえ、同・卷82・志36・兵3・州縣軍・東界の州縣軍一覽表には宜州がみえる。前者については、仁宗(位1123~1145)朝の規定であれば1145年以前の宜州の實在を伝えることになるが、當規定は明宗8~27(1178~1197)年までのある時點での記録であるという(蔭中丹「高麗史」食貨志外官祿條の批判」旗田鎮先生古稀記念會編「朝鮮歴史論集」上、龍溪書舍、1979年、450~454頁)。後者については、州縣軍一覽表の記録の成立年代について諸説あり、仁宗代にかかるとする見解もあるが、いずれの説にも根據があって容易に判断しがたいという(李基白「高麗州縣軍考」「高麗兵制史研究」一潮閣、1968年、205~206頁)。それゆえ、ここでは兩史料の宜州にはふれない。

16) 池内宏「咸鏡南道咸興郡に於ける高麗時代の古城址」(「大正八年度古蹟調査報告」第1冊、朝鮮總督府、1922年)44~47頁。

17) 「高麗史」卷82・志36・兵2・城堡、同卷129・列傳42・叛逆3・崔忠獻附崔怡。

き、これら年次の異なる宜州築城に関する三つの所傳は、いずれも事実とみることが可能である。

それならば「三國史記」が伝える湧州の存在時期と、宜州のそれとは重複する。「三國史記」の所傳も一應は疑えるが、「高麗史」卷53・志12・五行1には「(仁宗)二十三年六月甲申、大水。東界文・湧二州、山崩水涌、漂沒城門・人戶甚多」とあり、まさに「三國史記」撰進の年に湧州に洪水が起こったことを伝える。「三國史記」と對應して湧州の實在を伝える貴重な記事といえよう。1145年當時における湧州の實在を否定することは極めて難しい。湧州と宜州とは互いに別地と見なければならず、湧州=宜州=宜川郡=德源都護府とする(c)・(d)の所傳にそのまま従うことはできないのである¹⁸⁾。

宜州が宜川郡、德源都護府と順に改稱され、それを現在の德源とみることに別段問題はない。いっぽう泉井郡を湧州とする所傳については、次のような批判がある。すなわち「三國史記」地理志は泉井郡の領縣の高麗時代における所在地を悉く未詳とする。それは景德王代以降のある時点より、當該地域が長く靺鞨に没していたからであり、高麗初にその地を回復したときには泉井郡の故地も所在不明であった。新羅時代、朔庭郡(現在の咸鏡南道安邊、共和國では江原道に屬す)は泉井郡の隣郡であり、それゆえ高麗時代に登州(朔庭郡)の隣郡であった湧州が漫然と泉井郡にあてられた、という²⁰⁾註(11)池内論文70~72頁²¹⁾。しかし泉井郡の所在が全く不明だったならば、その領縣と同様、所在を未詳とすれば事足りる。領縣とは異なり、泉井郡を湧州に比定するにはそれなりの理由があったと思う。しかも先述の通り湧州を德源とすることはできず、それならば湧州は登州の隣郡とはならないのである。筆者は泉井郡を湧州に比定する所傳を信じる。

そこで第二に、改めて泉井郡=湧州の位置を考えてみたい。ただし高麗時代の湧州の所在は不明である。そこで渤海南境と新羅東北境との關係から泉井郡の位置を間接的にうかがうことにする。

まず、渤海の日本海側南境をみると、この方面の渤海の據點は南京南海府であり、現在の咸鏡南道北青青海土城に比定する説が有力である。この南京南海府管下には「吐号浦」があった²²⁾。従来その位置については諸説あったが、南京南海府との位置關係からのおおよその推測にとどまっていた。しかし最近、趙炳舜氏は「吐号浦」が「吐另浦」誤寫とみられることを根據に、「吐号浦」を都連浦に比定しており注目される²³⁾。筆者はこの見

18) 註12)池内論文43~44頁。

19) 田中氏は、臨津江河口附近の新羅の泉井口郡(坡州郡交河面)と同江上流の德源との地理的對應關係を根據に、泉井郡を德源とする所傳を認める(註9)田中論文58頁)。

20) 註12)池内論文70~72頁。

21) 註14)拙稿15~22頁。

22) 「續日本紀」卷34・光仁天皇・寶龜8 (777)年正月癸酉條に渤海使史都蒙の言として「由是、都蒙等、發自弊邑南海府吐号浦、西指對馬島竹室之津」とある。

23) 趙炳舜「敬海南京南海府의 位置推定에 對한 考察」(「書誌學報」28, 2004年)。

解を支持する。趙氏は都連浦を連浦面(共和國では咸州郡連浦里一帯)とするが、從來都連浦は廣浦(廣湖)に比定されてきた²⁴⁾。兩者は近接するので問題ないが、ひとまず渤海南境を廣浦以南とみておく。

次に、統一新羅の東北境を年代を追って考えてゆきたい。まず統一新羅時代、その位置を明確にたどれる最北方の郡縣は比列忽州(朔庭郡、安邊)である。比列忽州は、『三國史記』卷6・新羅本紀6・文武王8(668)年條に、

三月、(中略)、置比列忽州、仍命波珍浚龍文爲摠管。

とあり、668年に復置された²⁵⁾。續いて、以下の記事が見える。

(a)『三國史記』卷7・新羅本紀7・文武王上

(十五年秋九月二十九日)緣安北河設關城、又築鐵關城。

(b)『三國遺事』卷2・文虎王法敏

(前略)安北河邊築鐵城。

(b)は繫年を缺くが(a)に對應する記事とみてよい。(a)・(b)によれば、675年に安北河に沿って關城・鐵關城・鐵城(以下、鐵關城で代表させる)等と呼ばれる軍事施設が設置されたことがわかる。その位置については、後世鐵關という地名が咸鏡南道方面に散見されるので、ひとまずおよそ新羅東北境方面とみてよい。具體的に池内氏は、まず(a)の「鐵關城」を『新增東國輿地勝覽』德源郡護府・古跡條などにみえる「鐵關」にあて德源邑の北約6kmの望德山にある古城址に、次に安北河を德源の北を流れる北面川に比定して、さらに「關城」を望德山及び北面川の南にある別の望德山(小望德山)にあてる²⁶⁾が、李成市氏によれば、これら三者は同一の城を指す名稱であろう²⁷⁾という。以上の池内氏の比定は泉井郡=湧州=德源説によるので、その當否の判斷を今はひとまず保留する。そしてこの後、(b)によると681年に泉井郡が獲得された。それならば、鐵關城と泉井郡との位置關係は、前者を築いた後にその内側の後者を「取った」とは解しがたいので、新羅領内からみて前者が内側、後者がより外側となろう。

ただし、(b)の681年に始めて泉井郡を「取った」とする記事を疑う意見²⁸⁾がある。實は『三國史記』卷6・新羅本紀6・文武王下に、

(i)(九(669)年)夏五月、泉井比列列各連等、三郡民饑、發倉賑恤。

とみえるからである。下線部は「泉井比列列各連」と補正²⁹⁾すべきであり、それならば669年には既に泉井郡は新羅領だったことになる。(b)と(i)とは矛盾し、そして(i)が正し

24) 池内宏「高麗朝に於ける東女眞の海寇」(『滿鮮史研究』中世第2冊、吉川弘文館、1979年)309頁。

25) 以前の比列忽の沿革については、註12)池内論文18~30頁參照。

26) 註12)池内論文42~44頁。

27) 李成市「八世紀新羅・渤海關係の一視角」(『古代東アジアの民族と國家』岩波書店、1998年)395~396頁。

28) 註9)田中論文58頁。

29) 李丙燾校譯「三國史記」原文篇(乙酉文化社、1977年)65頁。

ければ強いて泉井郡の位置を鐵關城の外側に求める必然性はなくなるのである。

この問題を考えるのに参考となるのが『三國史記』卷7・新羅本紀7・文武王11(671)年條に載せる文武王の唐將薛仁貴への報書の一節である。そこには、

又卑列之城、本是新羅、高麗打得三十餘年、新羅還得此城、移配百姓、置官守捉。又取此城、還與高麗。

とある。「卑列之城」は比列忽州である。この一節は比列忽州がもともと新羅領であったことを根據に、そこまでの進出の正當性を新羅が唐側に主張したものである³⁰⁾。しかし下線部には、唐が比列忽州を高句麗に與えようとしていたとある。唐は新羅に政治的壓力をかけていたのであった。それゆえ671年の時点で、新羅は比列忽州までを守るべき自己領域と認識する一方、泉井郡を含む比列忽州以北は、唐の政治的壓力で一時的に空白地帯となったと思われるのである。唐の高句麗征伐に乗じて669年頃、一時的に泉井郡まで進出した新羅は、671年頃には比列忽州まで後退、そののち順に、675年に鐵關城を築き、その外側にある泉井郡を681年に再び取った、とみなすことができよう。

次に、泉井郡に築かれた(b)の「炭項關門」についてみてみよう。まずその位置については、およそ泉井郡の外側とみなしてよい。次に築造年代については、681年説と757年説とがある。池内氏は681年、新羅の泉井郡奪取時の築造とするが、それならば(b)で「取之」と「景德王改名」との間に「築炭項關門」の一句が入る筈である。681年説は疑問である。いっぽう宋基豪氏は「景德王改名」を「築炭項關門」までかけて、景德王16(757)年の郡縣改稱時の築造とみる³¹⁾。鋭い指摘であるが、「景德王改名」の一句は『三國史記』地理志に類出する定型句であり、それが「築炭項關門」までかかるとは考えがたい³²⁾。757年説にも疑問が残る。筆者は、炭項關門を『三國史記』卷8・新羅本紀8・聖德王20(721)年條に、
秋七月、徵何瑟羅道丁夫二千、築長城於北境。

とある「長城」とみなす。何瑟羅は現在の江原道江陵市である。その丁夫を徵發して北境に「長城」を築いたという。721年當時の北境は泉井郡であり、關門は長城とみなせる³³⁾ので、この「長城」と炭項關門を結びつけることが可能である。炭項關門の築造年代は721年であろう。

以上、統一新羅の東北境について考察した。その結果、南から順に比列忽州(安邊)→鐵關城・安北河→泉井郡→炭項關門が位置したことが分かった。先述の通り渤海南境は廣浦以南なので、泉井郡は安邊・廣浦間に位置したことになる。そして新羅と渤海との境界については、『新唐書』卷219・列傳144・北狄・渤海に「南比新羅、以泥河爲境」とある。泥河については龍興江、金津川、南大川、江陵市連谷面の連谷川などとする意見がある³⁴⁾3

30) 古畑徹「後期新羅・渤海の統合意識と疆域觀」(『朝鮮史研究會論文集』36, 1998年)27~29頁。

31) 宋基豪「東아시아 國際關係 속의 渤海와 新羅」(『韓國史市民講座』5, 一潮閣, 1989年)48頁。

32) 註12)池内論文46~47頁。

33) 註27)李論文395頁。

34) 龍興江説は、註8)松井論文422~425頁、島山富一「渤海史上の諸問題」(風間書房, 1968年)167頁な

が、南大川は安邊に近すぎ、連谷川は抑も新羅領内に深く入っていていずれも疑問である。唐浦以南、安邊以北で國境を畫するに相應しい河水は金津川または龍興江である。なお、泥河と新羅最北端の炭項關門との位置關係は、關門が國境の河川の外側に位置したとは考えがたいので、新羅領からみて泥河が外側、炭項關門が内側だったであろう。以上を念頭に置き、以下、二つの河川各おのを基點として泉井郡の位置を考えてみたい。

まず、泥河を金津川とみたばあい、先述した池内氏の考證が參考となる。再言するが、池内氏は721年築造の「長城」を龍興江と金津川との分水山脈にある永興郡の古長城に比定し、その分水山脈の峠である金陂嶺に炭項關門の所在を求める。さらにそれとの位置關係から泉井郡=湧州の所傳を否定し、泉井郡を和州(永興)としたのであった³⁵⁾。しかし先述のように、泉井郡=湧州の所傳は信じうる。またそれを否定せずとも、德源説を離れて泥河(金津川)及び「長城」・炭項關門との位置關係から、泉井郡を永興周邊に比定することは可能である。泉井郡候補地の一つに、永興周邊が挙げられる。ただし「高麗史」卷80・志80・食貨3・賑恤には、

(イ) (宣宗)十一 (1094) 年二月、以東路高・和・文・湧・定・長・登・交等八州、宣德・元興・寧仁・長平・永興・龍津等六鎮、因往年水旱、民多飢饉。(後略)

とあり、和州と湧州とが同時にみえる。それゆえ兩者は別地とすべきである。先に永興周邊と述べたのはそのためである。

次に、泥河を龍興江とみたばあい、それ以南のめばしい邑としては咸鏡南道高原、文川(舊文川、共和國では江原道に屬す)が挙げられる。しかし高原は平野に位置しており、「長城」及び炭項關門は山地に築かれたとみられるので(後述)地勢上いささかそぐわない。そこで文川についてみると、「高麗史」卷82・志36・兵2・站驛に、

(カ)朔方道掌四十二 (中略)追風【霜陰】鐵關 通達【高州】和遠【和州】德嶺【文州】(下略)

とあるのが注目される。高州(高原)に屬する二驛の一つに鐵關驛があったという。池内氏によれば、(カ)を含む站驛條の記事は、道名・州名・驛名等により考えると、主に高麗朝の中世の状態を伝えるという³⁶⁾。ここで池内氏は(カ)の鐵關驛を、德源望德山の鐵關に因むものと斷定する³⁷⁾。しかし德源・高原間には文川が位置する。(カ)には文州(文川)に屬する驛も見え、もし(カ)の鐵關驛が德源望德山附近にあれば、文州に屬するはずである。高麗後期~朝鮮時代の德源の鐵關と、高麗中世以前の鐵關とは別地だった可能性がある。(カ)の鐵關驛の位置を高原・文川間に求めてみたい。炭項關門を(カ)の鐵關驛附近と考えて前面が山

ど。金津川説は、註12)池内論文68~69頁。南大川説は、津田左右吉「新羅北境考」(「津田左右吉全集」第11巻、岩波書店、1964年)228~229頁。連谷川説は、徐炳國「新唐書敬瑄傳所載 泥河의 再檢討」(「東國史學」15・16、1981年)254~256頁。

35) 註12)池内論文49~70頁。

36) 同上、44頁。

37) 同上。

地で遮断される地勢を探すと、南川江支流の分水山脈が目をつく。その峠に泥岬がある。炭項關門を泥岬に比定する試案を提示しておきたい。従って泉井郡=湧州の所在はそれ以南となる。文川周邊をもう一つの泉井郡候補地に推定できよう。ただし、(i)を始めとして文州と湧州(泉井郡)とが同時に見える例が「高麗史」に散見される。従って両者もまた各々の別地となる。

最後に先に保留した、池内氏の安北河及び鐵關城に對する位置比定の當否についてふれておく。これまでの考察によれば、泉井郡の位置は、永興周邊または文川周邊に求められる。先述のように、新羅東北境には南から順に、比列忽州(安邊)→鐵關城・安北河→泉井郡(永興周邊or文川周邊)→炭項關門が位置しており、安北河を北面川に、鐵關城を德源望德山に比定する池内氏の見解は、これに照らして不自然なところはない。筆者は、池内氏の安北河及び鐵關城に對する位置比定をひとまず妥當と考える。

III. 新羅東北境における新羅と渤海との交渉³⁸⁾

それでは新羅東北境地域における新羅と渤海との交渉は、どのようなものであったのか。この問題を考えるために、本節では主にまず第一に兩國境界の交通路の實態を明らかにし、交渉の有無を検証する。次に第二に新羅・渤海接隣地域の住民構成とその來歴、そして彼らの他者認識にふれ、最後に當該地域の兩國領域民による交渉のありかたに言及しようと思う。

まず第一點を考える上で、手がかりになるのが前掲史料(a)である。(a)は渤海柵城府~泉井郡間の驛路の存在を伝え、それは「新唐書」渤海傳の「新羅道」にあたると考えられている。こうした交通路の存在から、新羅東北境における新羅と渤海との恒常的な交渉を想定する意見がある³⁹⁾。それゆえ(a)は本稿の課題にとって重要な記録なのだが、從來その史料の性格に十分注意が拂われてきたとは言い難い。そこで筆者の理解に従い(a)の史料の性格を再確認しておきたい。

まず、(a)の「賈耽古今郡國志」についてみると、賈耽(730~805年)とは、唐の信州南皮(現在の河南省南皮)の人、貞元(785~805)年間の宰相で、地理・陰陽に精通し多くの地理書を残した。その著書に「古今郡國縣道四夷述」40巻があり、貞元17(801)年11月に表獻

38) 以下、本節の記述は主に註(7)及び註(14)前掲拙稿に基づく。詳細については、これら拙稿を参照されたい。

39) 朴時亨「渤海史研究のために」(旗田巍・井上秀雄編「古代朝鮮の基本問題」學生社、1974年)161~165頁、註(31)宋論文47~49頁、濱田耕策「迎賓機構」(註(6)濱田前掲書)154~155頁、同b「渤海國の京府州郡縣道の整備と首領の動向」(「白山學報」52、1999年)773頁など。

された。同書は諸書に様々な名稱で引用されており、「賈耽古今郡國志」は「古今郡國縣道四夷述」であるとみてよい⁴⁰⁾。

ところで實は「三國史記」地理志には(a)以外にも數箇所「古今郡國縣道四夷述」が引用される。次にそれらも併せて検討し、(a)の史料性格を吟味しよう。

(1)新羅疆域。(中略)。賈耽四夷述曰。「辰韓 在馬韓東 東抵海 北與濊接」。

(2)朔州。賈耽古今郡國志云。「句麗之東南 濊之西 古貊地 蓋今新羅北朔州」。

(3)溟州。(中略)。賈耽郡國志云。「今新羅北界溟州 蓋濊之古國 前史以扶餘爲濊地 蓋誤」。

(1)の「賈耽四夷述」も「古今郡國縣道四夷述」とみてよい。これら「古今郡國縣道四夷述」逸文⁴¹⁾ほかから、「古今郡國縣道四夷述」の記述一般と(a)及び(1)~(3)下線部との特徴として、次の三點を擧げることができる。第一に、「古今郡國縣道四夷述」は、史料成立時點の現在地名を説明することを最大の目的とし、そのために過去の沿革をたどることがある點である。それゆえ、現在地名を缺く(1)には「辰韓」で説明される現在地名を想定すべきであり、私見ではそれは新羅王城(慶尙南道慶州市)である。これを踏まえ第二に、(a)及び(1)~(3)下線部が、ある使者による日本海沿岸使行の際の情報に基づく一連の史料と考えられる點である。(a)及び(1)~(3)下線部に登場する地名は、渤海南海府、鴨渚府(吉林省臨江)、扶餘府(同慶安)、柵城府~新羅泉井郡の驛路、新羅王城、朔州(江原道春川市)、溟州(同江陵市)である。特に南海府及び柵城府以下はいずれも日本海沿岸地域であり、これら地點を繋ぐと柵城府から新羅王城に到る一本の交通路のようである(地圖2参照)。こうした登場地名の偏りと、生なましい驛路の情報とは、これら地域の實際の通過に基づくと思う。そして第三に、(a)及び(1)~(3)下線部が757年12月~801年11月までの實情を伝える記事だという點である。(2)・(3)の朔州・溟州は757年12月の景德王の郡縣改稱後の地名⁴²⁾であり、また先述の如く「古今郡國縣道四夷述」の表載は801年11月だからである。

以上のように(a)及び(1)~(3)下線部の特徴を理解した上で、併せて注目されるのは、本情冒頭でふれた賈耽「道里記」の「登州海行入高麗・渤海道」である。

(4)登州東北海行 過大謝島・龜欽島・末島・烏湖島三百里。北渡烏湖海 至馬石山東之

40) 榎一雄「賈耽の地理書と道里記の稱とに就いて」(「榎一雄著作集」第7卷、汲古書院 1994年) 184~195頁。

41) 實はこの他にも「古今郡國縣道四夷述」を間接的に引用した文が「三國史記」地理志に存在するが、今はふれない。

42) ただし(a)下線部の「泉井郡」は郡縣改稱前の地名である。宋氏はここから(a)下線部を757年以前のことを伝える史料とする(註31)宋論文48頁)。この點について、筆者は以前「泉井郡」を「井泉郡」の誤りと考えた。しかし、後述するように(a)下線部は782~784年頃のことを伝える史料とみられ、加えて泉井郡は新羅領東北端である。それゆえ757年11月から間もない最邊境の泉井郡では、改稱地名の使用が徹底されていなかったと考えることができる(木村談先生のご教示)。またそもそも「泉井」と「井泉」とは、泉も井も同義なので、訓で「井」と讀まれ(梁柱東「増訂古歌研究」一潮閣、1965年、142頁)通用したとも考えられよう。

都里鎮二百里。東傍海嶺。過青泥浦・桃花浦・杏花浦・石人任・橐駝灣・烏骨江八百里。乃南傍海嶺。過鳥牧島・貝江口・椒島。得新羅西北之長口鎮。又過秦王石橋・麻田島・古寺島・得物島。千里至鴨綠江唐恩浦口。乃東南陸行。七百里至新羅王城。自鴨綠江口舟行百餘里。乃小舫泝流東北三十里至泊汭口。得渤海之境。又泝流五百里。至丸都縣城。故高麗王都。又東北泝流二百里。至神州。又陸行四百里。至顯州。天寶中王所都。又正北如東六百里。至渤海王城。

賈耽「道里記」とは實は「皇華四達記」であり、「皇華四達記」とは「古今郡國縣道四夷述」の四夷述部分を単行したものであるという⁴³⁾。つまり(○)と(a)及び(1)~(4)下線部とはいずれも「古今郡國縣道四夷述」の逸文なのである。しかも、(○)は唐の登州(現在の山東省蓬萊)から新羅王城と渤海王城(黒龍江省寧安東京城)とへ到る二つのルート⁴⁴⁾を記すが、その兩終點が(a)及び(1)~(4)下線部から復元された日本海沿岸ルート⁴⁵⁾に接続し(地圖2参照)。また(○)が伝える内容は757年12月~801年11月のこととみて矛盾しない。(○)と(a)及び(1)~(4)下線部の記事とは、一連の記事と見なすべきなのである。そして、それは8世紀中葉に唐~渤海~新羅~唐の東アジア使行を果たした唐の勅使韓朝彩の見聞に基づく記事であり、その使行ルートの痕跡を記している⁴⁶⁾と考えられる。

韓朝彩については「續日本紀」卷25・淳仁天皇・天平寶字8(764)年7月條に、

○甲寅。新羅使大奈麻金才伯等九十一人。到着大宰府多津。遣右少弁從五位下紀朝臣牛養・授刀大尉外從五位下栗田朝臣道麻呂等。問其由緒。金才伯言曰。「唐國勅使韓朝彩。自渤海來云。「送日本國僧戒融。令達本郷已畢。若平安歸郷者。當有報信。而至于今日。寂無來音。宜差此使。其消息欲奏天子」。仍齎執事牒參大宰府。朝彩者。上道在於新羅西津。本國謝恩使蘇判金容。爲取大宰報牒寄附朝彩。在京未發」。(中略)。及其歸日。大宰府報牒新羅執事曰。「檢案內。被乾政官符條。「得大宰府解條。〈得新羅國牒條。〈依韓內常侍請。欲知僧戒融達不〉。府具狀申上者〉。以去年十月。從高麗國。還歸聖朝。府宜承知卽令報知」。

とあり、764年までに唐から渤海を経て新羅に到っていたことが分かる。その唐出立は762年頃であろう。韓朝彩が寶應元(762)年の大欽茂冊封の際の冊封使とみられ、その翌年は冊書が出された時点と考えられる⁴⁵⁾からである。(○)及び(a)・(1)~(4)下線部の情報と、こうしたおよそ762~764年にわたる韓朝彩の極めて特殊な東アジア使行とを結びつけることは、決して不當ではないであろう。

43) 註40)要論文197~200頁。

44) 田中氏は、(○)の朔州を韓朝彩の使行ルートから除外し、韓朝彩は新羅五通の一つ「北海通」を利用し、泉井郡から直接日本海沿岸を南下して順に溟州、新羅王城に到ったとする(註9)田中論文82~87頁)。なお田中俊明「新羅の交通體系に對する豫備的考察」(「朝鮮古代研究」5、2009年)参照。

45) 馬一虹「八世紀中葉の渤海と日本の關係」(「國學院大學大學院紀要文學研究科」29、1998年)285~289頁。なお韓朝彩については、丸山裕美子「唐國勅使韓朝彩についての覺書」(「續日本紀研究」290、1994年)も参照。

(a)は、韓朝彩が渤海から新羅へと新羅東北境を陸路通過した際の見聞に基づく史料と考える。このように(a)の史料性格を見極めると、次の二点を指摘できる。まず、確かに新羅東北境における新羅・渤海兩國境界を人が通過したのであって、兩國境界は完全に遮断されていたわけではなかったことである。次に、渤海が新羅へ通ずる新羅道に驛を設置・整備し、新羅道を重視していたことである。

それゆえ、(a)から新羅・渤海兩國国家間の友好的かつ頻繁な交渉を読みとる意見も一應もったものだが、いっぽう次に掲げる史料により、兩國は新羅東北境で鋭い緊張関係にあった、とする意見があり無視できない。そこで、次にこの点について考えたい。

(p) 『新唐書』卷220・列傳145・東夷・新羅

新羅、弁韓苗裔也。居僕樂浪地，橫千里，縱三千里，東拒長人，東南日本，西百濟，南瀕海，北高麗。(中略)。長人者，人類長三丈，鰓牙鉤爪，黑毛覆身，不火食，噬禽獸，或搏人以食，得婦人，以治衣服。其國連山數十里，有峽，固以鐵關，號關門，新羅常屯弩士數千守之。

(p)は『新唐書』新羅傳の所謂長人記事であり、これについては李成市氏の精細な研究がある⁴⁶⁾。それによれば、(p)は實は『太平廣記』卷481・新羅にも引かれる牛肅「紀聞」を典拠とする。「紀聞」もあわせた長人記事の内容は、天寶2(743)年頃の新羅の一部國內事情を伝えるというが、私見ではもう少し後の8世紀中葉の出来事を含むと考える。そして長人記事は、720~750年代にわたる新羅と渤海との國際的緊張を背景として、軍事施設を挟んで境を接する渤海領域民に對する恐怖心から新羅人が抱いた異様なイメ[ジ]を伝えるものであり、その後も新羅人と渤海領域民との交渉は緊密でなかったという。

先に見たように、(a)の情報にまさに764年頃、渤海から新羅へと新羅東北境を陸路通過した韓朝彩により収集された。韓朝彩が(p)にうかがえるような軍事的緊張のもとを通過できたのは、彼が唐の勅使であつたからにほかならない。(a)の情報はそうした背景を念頭に置いて理解すべきであり、そこからただちに渤海・新羅兩國国家間の友好的かつ頻繁な交渉を想定するのはむずかしい。

ただし先述のように、兩國境界は完全に遮断されていたわけではなかった。確かに(p)と對應する「紀聞」には「其境，限以連山數千里，中有山峽，固以鐵門，謂之鐵關。常使弓弩數千守之，由是不過」とあり、特に下線部からは、新羅が境界の通過を厳しく管理していたことがうかがえる。しかし前節でみた咸鏡南道地域の新羅と渤海との境界は、すでに指摘されるように三國時代に高句麗と新羅との境界であつたり、相互に役交渉な地域であつたりしたことはなく、古來この地域の住民であつた濊族にとっては、必然性のないものであつた⁴⁷⁾。そうであるならば、たとえ國家間の交渉は絶無に近いものであつたとしても、當該地域の住民による兩國境界の往來は、細ぼそとしたものではあれ存在したのではな

46) 註27)李論文。

47) 註27)李論文。

いだろうか。

そこで改めて長人記事についてみると、注目されるのはところどころ事実を反映したと思われる部分がみえる点である。まず(p)にみえる食人譚については、8世紀中葉を記述の対象年代とするというチベット語文書(P. 1283)に、渤海を指すMug-lig=Ke'u-liでは人肉を食したと伝えられる⁴⁸⁾。次に禽獸を食らうことについては、勿吉・靺鞨の習俗として、毒矢で禽獸を射たり、宜猪を養育してその肉を食べ、皮を着たことが伝えられる⁴⁹⁾。また黒毛で(が)身を覆うとは、毛皮の着用を指すと思われる。毛皮の着用については、先述の猪皮の着用のほか、渤海使が貂・虎・熊等の毛皮を日本や唐に貢獻しており、特に日本では渤海の黒貂皮が珍重されていたことが伝えられる⁵⁰⁾。さらに、「紀聞」には長人が「醇酒」を出して宴を開いたとあるが、勿吉・靺鞨における飲酒は中國史書に特筆される⁵¹⁾。長人は身長三丈(約9m)で、鯢のような牙、鉤のような爪を持つなどという描寫を始めとする長人記事全體をみると、確かに現實的ではない不可解な觀念的記事ということになる。しかし以上のような、長人記事の内容と渤海人あるいは勿吉・靺鞨人の習俗との一致の存在は、新羅人が渤海領域民とある程度の接觸を持ち、彼らに関する情報を有していたことを示唆すると思うのである。

以上、新羅と渤海との境界における兩國領域民の交渉が確かに存在していたことをみた。そこで次に本節冒頭に掲げた第二点について考えてみよう。

第一に、新羅・渤海接壤地域の住民構成とその來歴、そして彼らの他者認識についてみると、まず長人として描寫された渤海領域民とは、黒水・鐵利(鐵勒)・達姑(達姑)などの北部靺鞨諸族を指すと思う。新羅末高麗初になると、新羅東北境においてこれら諸族の活動が散見される。私見によれば、9世紀末のその活動は、部落名を名乗るなど自立性を保ちながらも、あくまで渤海の支配秩序の枠内にあった。従ってそれ以前にこれら諸族は遠く松花江・黒龍江流域の本來の住地から渤海によって遷徙されたとみてよい。そして達姑については不詳であるが、黒水・鐵利については少なくともその一部が740年代までに渤海に服屬していたことが確認できる⁵²⁾。長人記事には渤海領域民に対する新羅人の異形・異類觀が反映されている。古來當該地域に居住していた濊族は、新羅人にとって長らく境を接して比較的身近な存在であったであろう。それゆえこうした異形・異類觀は、新羅東北境から地理的に遠く離れ、これまで未知の存在であった北部靺鞨諸族に対するものとみ

48) 森安孝夫a「チベット語史料中に現れる北方民族」(『アジア・アフリカ言語文化研究』14, 1977年)9~4頁及びb「シルクロードと唐帝國」(講談社, 2007年)316~334頁。

49) 禽獸を射ることについては、『魏書』卷100・列傳88・勿吉、『北史』卷94・列傳32・勿吉、『隋書』卷81・列傳46・東夷・靺鞨など。宜猪を養育することについては、『舊唐書』卷199下・列傳149下・北狄・靺鞨、『唐會要』卷96・靺鞨など。

50) 藤川政次郎「滿洲土產黒貂裘」(『滿洲史談』日光書院, 1939年)141~148頁。

51) 『魏書』勿吉傳、『北史』勿吉傳、『隋書』靺鞨傳、『通典』卷186・邊防2・東夷下・勿吉など。

52) 黒水については、『古史』卷58~59頁。鐵利については、『續日本紀』卷16・天平18(746)年元年條に、濊族人に伴われ日本に來朝したことがみえる。

てこそふさわしいと思うのである。加えて先述のように、長人記事の内容が、渤海成立以前の勿吉や靺鞨、黒水靺鞨の習俗として伝えられるものと共通することが注意される。長人を黒水・鐵利(鐵勒)・達姑(達靼)などの北部靺鞨諸族とみてよいであろう。

いっぽう、次に長人に對して異形・異類觀を抱いていた新羅人、というばあいの新羅人の實體について考えておきたい。そこで注目されるのは、(p)で長人を新羅の東とするその方位觀である。統一新羅時代、新羅東北境に對する方位觀は北であるから、これは關門つまり新羅東北境地域を基點にしたものとみてよい⁵³⁾。また長人記事には新羅の邊境防備に關する極めて特殊具體的な描寫が見られる。長人記事が中國史料であることは勿論であるが、それは新羅東北境の現地情報に基づく記事と考えられるのである。それゆえ、長人に對して異形・異類觀を抱いた新羅人とは新羅東北境住民なのであり、それは濊族であろう。長人記事は、渤海により遷徙された北部靺鞨諸族に對する新羅東北境住民の他者認識ということができる。なお、濊族は新羅と渤海それぞれに編入されたが、たとえ國を異にしたとはいえ、自らと種族系統を同じくする新羅東北境に程近い栗末・白山などの南部靺鞨諸族⁵⁴⁾に對して、異形・異類觀を抱いたとは考えがたい。この點からも、長人は北部靺鞨諸族とみられるのである。

そして第二に、こうした新羅・渤海接壤地域における交渉のありかたについて最後に言及したい。前節でみたように、新羅と渤海とは泥河を境界としており、その内側に新羅は炭項關門(長城)を設けていた。その状況は8世紀中葉も同じであったと思われる。(p)の長人記事に見える山峽の關門とは、炭項關門にあたるのであろう⁵⁵⁾。それならば長人すなわち渤海により遷徙された黒水・鐵利・達姑の北部靺鞨諸族は、境界の泥河を越え、炭項關門までの新羅領に侵入していたことになる(圖1参照)。つまり泥河から炭項關門までの地域は、公式的には新羅領であっても、渤海領域民の侵入が可能だったのである。いっぽう(p)や「紀聞」にみえる長人の人さらいなどの活動は、組織的なものとは思えない。北部靺鞨諸族を遷徙していた渤海も、邊境で彼らの自立的活動を許していたというのが實情であった。

このように、新羅領でありながら渤海支配下の北部靺鞨諸族の侵入を許し、いっぽうで彼らの自立的活動を許容していた渤海の邊境支配からみて、新羅・渤海兩國の境界である泥河附近を一種の緩衝地帯と見なすことができよう。こうした緩衝地帯において、頻繁ではなくとも渤海領域民と新羅領域民とが接觸を持っていたというのが、新羅・渤海接壤地域における交渉のありかたなのであった。そしてこうした交渉は、後代における東・西女

53) 李純正(27)論文385頁。

54) 權五重「靺鞨의 種族系統에 관한 試論」(『震檀學報』49, 1980年)6~24頁。

55) 「紀聞」には「鐵關」とみえる。思うに關門は(p)にみえるように、「鐵關」(鐵の門)によって固められることが多かったであろう。後代に鐵關という地名が各地に散見されるのも、そのためと思われる。炭項關門には鐵關という別名は傳えられていないが、長人記事の「關門」「鐵關」を炭項關門に比定して問題ないと考ええる。

眞と高麗との間の活発な交渉⁵⁶⁾の史的前提をなすものであったと思われるのである。

IV. おわりに

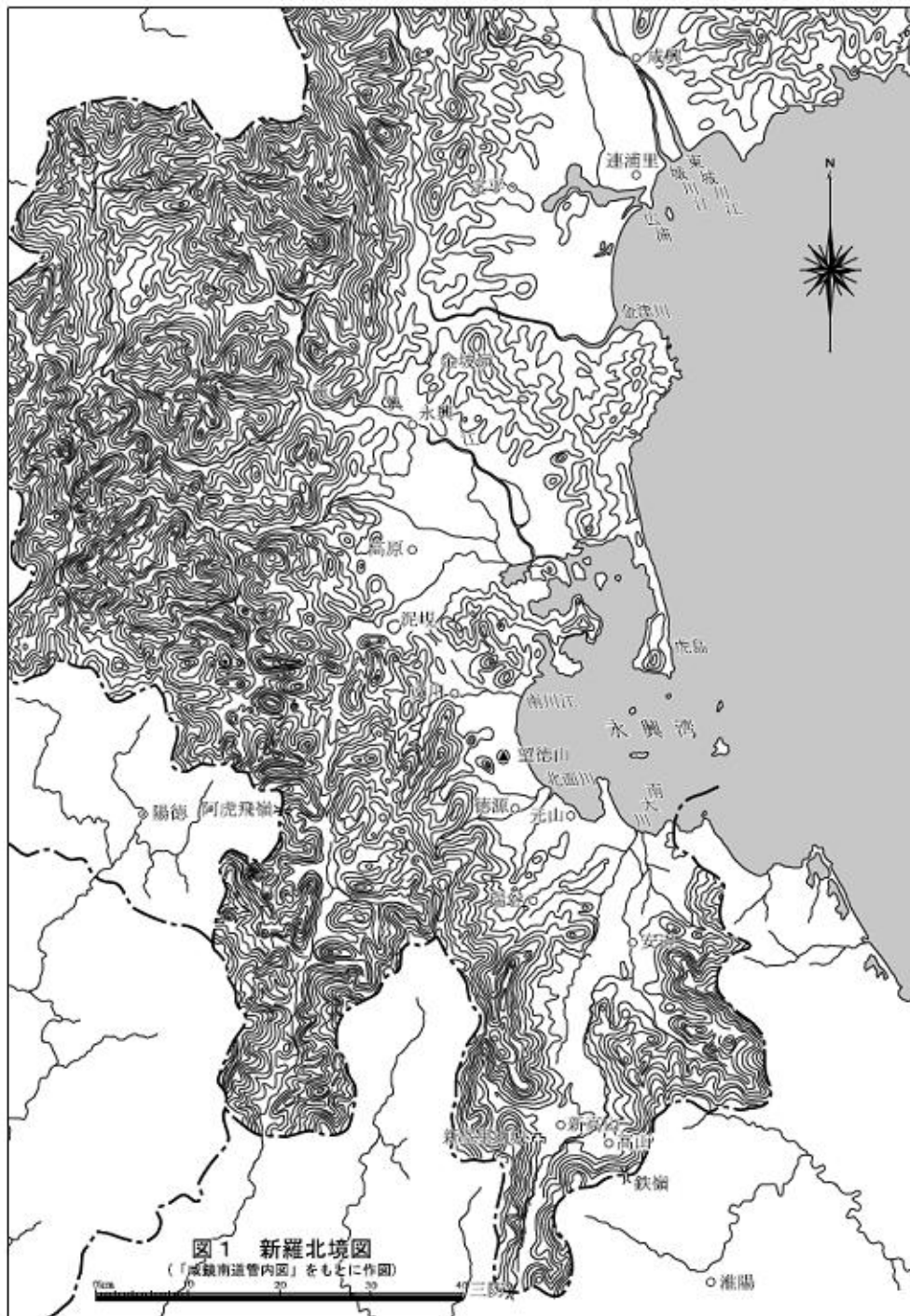
統一新羅時代の東北端の邑である泉井(井泉)郡の位置は、永興周辺あるいは文川周辺に求めることができる。その外側には山峽を利用して築かれた長城、すなわち炭項關門があり、さらにその外側の泥河でもって渤海との境界を畫していたと考えられる。

こうした新羅と渤海との境界における兩國領域民の交渉は、確かに存在していたと考えられる。その交渉の擔い手である各おのの領域民のうち、渤海領域民とは渤海により遷徙された黒水・鐵利(鐵勒)・達姑(達姑)などの北部靺鞨諸族、新羅領域民とは濊族であった。新羅・渤海兩國の境界である泥河附近は、新羅領でありながら渤海支配下の北部靺鞨諸族の侵入を許し、いっぽうで渤海が彼らの自立的活動を許容する緩衝地帯と評價することができる。こうした緩衝地帯で、頻繁ではなくとも兩國領域民が接觸していた。それが新羅・渤海接壤地域における交渉のありかたなのであった。

小稿では、國家レベルでの交渉とは異なる次元の交渉の實相にふれてみた。思うに、ひとくちに新羅國家、渤海國家といっても、領域全體に等質的な支配や社會が展開したわけではないであろう。地域により支配のありかた、居住民の種族的様相、意識などは多様性を示しうる。邊境である新羅・渤海接壤地域の様相は、我われにそれを具體的に教えてくれる一つの實例ではないか、と思うのである。

56) 註24)池内論文。

<附 錄>



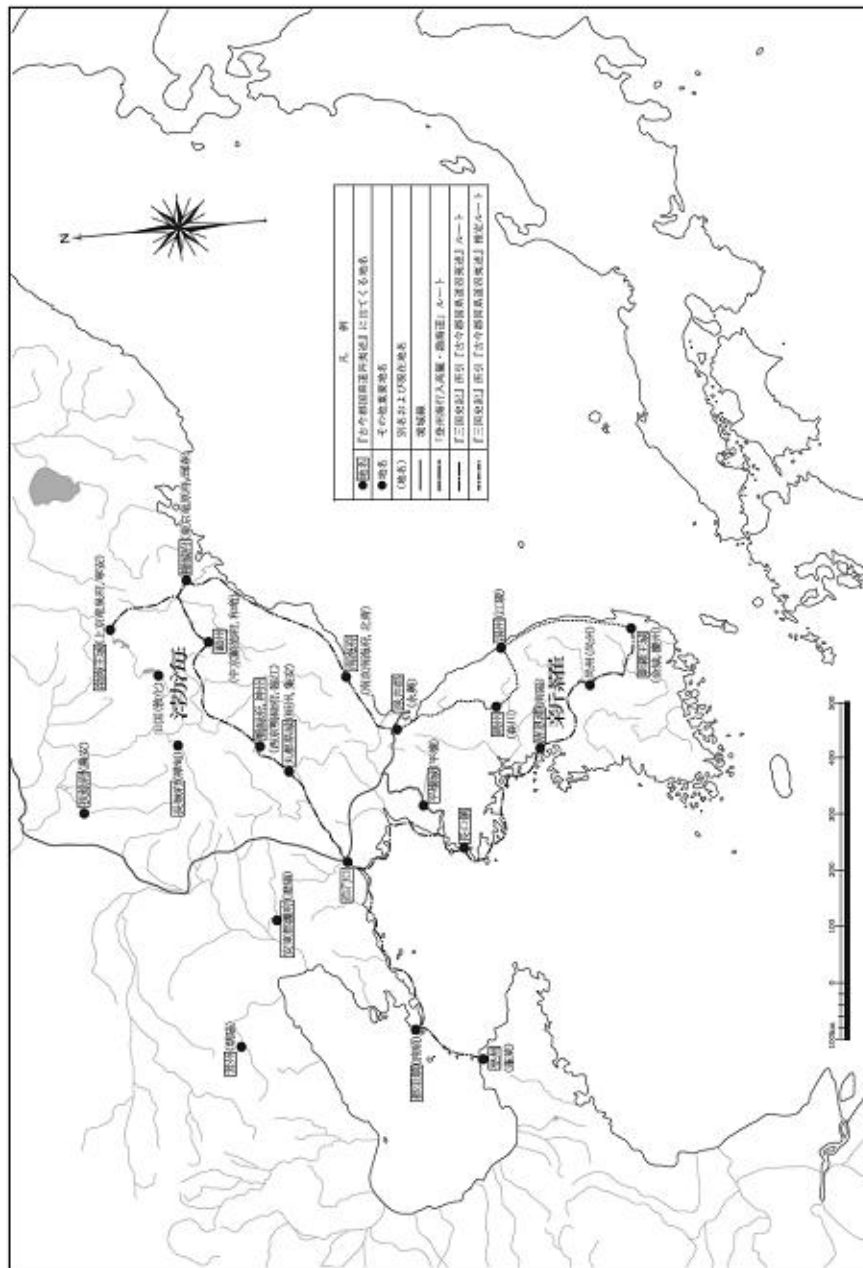


図2 八世紀中葉の東アジアと交通ルート

新羅東北境에 있어서 新羅와 渤海의 交渉에 關한 覺書

赤羽目匡由 著

이유진 옮김¹⁾

目 次

- I. 머리말
- II. 統一新羅의 東北境開拓과 泉井(井泉)郡의 位置
- III. 新羅東北境에 있어서 新羅와 渤海의 交渉
- IV. 맺음말

I. 머리말

新羅와 渤海의 外交關係에 대해 기록한 史料는 극히 적다. 양국간 使節의 交換에 대해 연대순으로 보면, 첫째 『東文選』卷33·表箋 崔致遠「謝不許北國居上表」²⁾는 渤海建國當初 그 初代王 大祚榮(位698~719年)이 新羅에 救援을 청하고, 이에 대해 新羅王이 「大阿餐」(新羅17等官位の 第5等)을 하사한 것을 전한다. 둘째 『三國史記』新羅本紀에서는 元聖王 6(790)년과 憲德王 4(812)년에 新羅가 渤海에 使節을 派遣했던 두 예가 알려져 있다. 셋째 『契丹國志』卷1·太祖는 渤海末 大祚榮(位906頃~926年)가 契丹을 두려워하여 은밀히 新羅와 同盟을 맺었다고 한다. 이들 세 사례 중 첫 번째 사례는 渤海에 대한 新羅의 優位를 唐에 主張하는 文脈으로登場하는 사항이므로 信憑性에 약간 疑問이 남는다. 또 세 번째 사례에서는 使節交換의 實相을 살피기 어렵다. 그러나 두 번째 사례에 대해서는 史實이라고 해도 좋을 것이다. 이들 기사가 전하는 交渉이 이루어진 각각의 國家의 事情에 대해서는 韓圭哲氏의 精細한 分析³⁾이 있어 參考가 된다.

1) 赤羽目匡由(日本學術振興會特別研究員PD), 이유진(승실대학교)

2) 「東人之文四六」(『高麗名賢集』5, 成均館大學校大東文化研究院, 1980年) 卷1·事大表狀에도 수록.

3) 韓圭哲「渤海의 對外關係史」(新書苑, 1994年)第2章.

이 외에 양국의 직접적인 接觸으로, 732年 渤海의 登州 공격을 시작으로 735년경에 收拾한 唐渤海紛爭⁴⁾에 있어서 新羅의 參戰이나, 大仁秀(位818~830年)의 新羅侵攻⁵⁾ 등을 들 수 있고, 간접적으로는 9世紀末 新羅와 渤海의 爭長事件⁶⁾으로 著名한 것처럼, 唐廷에 있어 양국 使節의 接觸을 들 수 있다.

그런데 이상의 여러 사례는 국가간의 말하자면 非日常的인 交渉·接觸이라 할 것이다. 그러나 한편 新羅와 渤海는 대략 8세기 초에서 10세기 전반에 걸친 장기간 서로 국경을 접하고 있었다. 이러한 恒常的인 接觸 속에서 양자는 어떠한 關係를 맺고 있던 것일까.

그래서 小稿에서는 먼저 특히 泉井(井泉)郡의 位置를 중심으로 新羅東北境의 地理를 確認하고, 다음으로 이 地域에 있어서 新羅와 渤海의 교섭상태로 이 문제에 接近하고 싶다.

II. 統一新羅의 東北境開拓과 泉井(井泉)郡의 位置

新羅와 渤海의 境界에 대해 한반도西北方面(大同江(沮江) 이북, 鴨綠江 이남)에서 국경을 접하고 있었다고 하는 論考도 있다. 그러나 「新唐書」卷43下·志33下·地理7下·靺鞨·州條末尾에 소위 賈耽 「道里記」의 「登州海行入高麗·渤海道」는 泊汜口(靺河와 鴨綠江의 合流點)에서 大同江의 남쪽까지를 唐領으로 한다(地圖2 參照). 이 記事는 내 생각으로는 8세기 중엽⁷⁾, 늦어도 9세기 초의 事情을 전한다.⁸⁾ 周知하는 것처럼 그 후에도 新羅領은 大同江을 넘지 않고, 또 新羅末 高麗初에 平壤이 오랫동안 荒廢해 있던 것에서 新羅, 渤海 모두 한반도 西北方面을 領域化하지 않았다고 보인다.⁹⁾ 양국은 한반도 東北方面에서 국경을 접하고 있던 것이다.

4) 唐渤海紛爭에 대해서는 末松保和 「郡縣制完成期の問題點」(「新羅の政治と社會」下, 吉川弘文館, 1995年), 古畑徹 a 「大田藝の亡命年時について」(「集刊東洋學」51, 1984年), 同b 「日渤海交渉開始期の東アジア情勢」(「朝鮮史研究會論文集」23, 1986年), 同c 「唐渤海紛爭の展開と國際情勢」(「集刊東洋學」55, 1988年), 同d 「張九齡作「勅諭海王大武藝書」と唐渤海紛爭の終結」(「東北大學東洋史論集」3, 1988年), 同e 「張九齡作「勅諭海王大武藝書」第一首の作成年時について」(「集刊東洋學」95, 1988年), 石井正敏 「對日本外交開始前後の渤海情勢」(「日本渤海關係史の研究」吉川弘文館, 2001年)等 참조.

5) 「遼史」卷38·地理志2·東京道·東京遼陽府에

遼遼縣, 本漢平郭縣地, 渤海改爲長寧縣, 唐元和中, 渤海王大仁秀, 南定新羅, 北略諸部, 開置郡邑, 遂定今名, 戶一千.

이라고 있다.

6) 濱田耕策 「唐朝における渤海と新羅の爭長事件」(「新羅國史の研究」吉川弘文館, 2002年).

7) 拙稿 「八世紀中葉における新羅と渤海との通交關係」(「古代文化」56-5, 2004年), pp.31~39.

8) 松井等 「渤海國の疆域」(「滿洲歴史地理」第1卷, 丸善, 1940年), pp.425~426.

9) 「三國史記」卷50·列傳10·弓裔, 「高麗史」卷1·世家1·太祖1, 및 田中俊明 「渤海建國初期의 對新羅關係」(「北方史論叢」10, 2006年)p. 69.

그러면 먼저 統一新羅의 東北境을 確認해 두자. 첫째 新羅 東北端의 邑은 다음의 記事에 의해 泉井郡이 된다.

(a) 『三國史記』卷37·雜志6·地理4

賈耽古今郡國志云. 「渤海國南海·鴨綠·扶餘·柵城四府. 玆是高句麗舊地也. 自新羅泉井郡至柵城府. 凡三十九驛」.

(a)는 渤海柵城府(東京龍原府. 吉林省琿春八連城¹⁰⁾)에서 新羅 泉井郡까지 39개의 驛이 설치되어 있던 것을 전한다. 柵城府. 泉井郡 모두 日本海側에 位置하므로(泉井郡의 位置에 대해서는 後述), 渤海에서 新羅에 들어가 最初의 邑인 泉井郡은 新羅東北端이 되는 것이다.

둘째, 그 泉井郡의 위치에 대해서는 2개의 의견이 있다. 먼저 사료에 따라 현재의 咸鏡南道 德源(朝鮮民主主義人民共和國(以下, 共和國)에서는 江原道 元山市의 北部)로 하는 것이 一般的이다(以下, 本節의 記述의 理解에 맞추어 地圖1을 더불어 참조). 즉 泉井郡은 『三國史記』卷35·雜志4·地理2·朔州에.

(b) 井泉郡. 本高句麗泉井郡. 文武王二十一(681)年. 取之. 景德王 改名. 柒炭項關門. 今湧州. 領縣三. (以下 引用史料中の ()안은 筆者의 註 【】안은 割註)

이라고 있어, 「今」즉 『三國史記』編纂時(1145년)의 湧州에 해당한다고 한다. 湧州는 『高麗史』卷58·志12·地理3·東界에.

(c) 宜州. 本高句麗泉井郡【一云. 於乙貢】. 新羅文武王二十一年. 取之. 改爲井泉郡. 高麗初. 稱湧州. 成宗十四年. 置防禦使. 後更今名. 睿宗三年. 築城. 別號東牟【成廟所定】. 又號宜春. 宜城. 要害處有鐵關. 海島有竹島.

라고 있어, 후에 宜州로 改名되었다. 그 宜州는 『新增東國輿地勝覽』卷49·咸鏡道·德源郡護府·建置沿革에.

(d) (前略). 高麗時. 稱湧州. 成宗十四年. 置防禦使. 後改宜州. 睿

宗三年. 築城. 本朝太宗十三年. 例改宜川. 世宗十九年. 改今名爲郡. 二十七年. 以穆·翼·度·桓四代御鄉. 陞爲郡護府.

라고 있어, 후인 朝鮮時代에 宜川郡¹¹⁾. 德源郡護府로 되었다고 한다.

그러나 한편 池內宏氏는 泉井郡을 咸鏡南道 永興(共和國에서는 金野郡)이라고 한다.¹²⁾ 新羅北境에 쌓았던 長城 및 新羅와 渤海의 境界에 관한 詳細한 檢討를 통해, 前者를 龍興江(金野江)과 金津川(金津江)의 分水山脈에 있는 永興郡의 古長城에 比定하고, 後者에 대해서는 『新唐書』渤海傳이 양국의 國경으로 하는 「泥河」를 金津川으로 한

10) 河上洋 「渤海の交通路と五京」(『史林』72-6, 1989年).

이하 渤海五京의 地理比定에 대해서는 本論文을 참조.

11) 『世宗實錄地理志』卷155·地理志·咸鏡道·宜川郡.

12) 池內宏 「眞興王의 戊子巡境碑と新羅の東北境」(『滿鮮史研究』上世第2冊, 吉川弘文館, 1960年)p.69.

다. 또 (b)의 湧州를 和州(永興)의 잘못이라고 한다.¹³⁾

筆者는 앞서 泉井郡을 永興로 하는 견해에 따라 新羅東北境情勢를 考察했다.¹⁴⁾ 그것은 첫째 湧州를 宜州, 宜州를 德源으로 하는 (c)·(d)의 기록에 疑問을 품고 있었기 때문이고, 둘째 池內氏의 考證이 극히 精微해서 대체로 따를 만하다고 생각했기 때문이다. 그러나 그 때 설명 없이 湧州=德源說에서 물러나 池內說을 採用했다. 또 池內氏가 (b)의 湧州를 和州의 잘못이라고 한 점에는 無理가 있다고 생각한다.

그래서 이하 湧州를 德源으로 하는 기록의 當否와 泉井郡의 位置 두 가지에 대해 筆者 나름으로 고쳐 생각해 보고 싶다.

첫째, 湧州를 德源으로 하는 기록의 當否를 생각해 보자. 湧州를 德源으로 하는 기록을 의심하는 이유는 湧州와 宜州가 각각 同時期에 實在했다고 볼 수 있기 때문이다. (b)의 「今湧州」라는 註記는 「三國史記」가 撰進되었던 仁宗 23(1145)년경 당시 湧州의 實在을 전하는 記事로 볼 수 있지만, 한편 宜州에 대해서는 다음의 築城記事가 전해진다.

(e) 「高麗史」卷12·世家12·睿宗 1

(睿宗三年三月)尹璫, 又築宜州通泰平戎三城, 徙南界民, 以實新築九城.

(f) 「高麗史」卷82·志36·兵2·城堡

(顯宗)七年, 城宜州, 六百五十二間, 門五.

睿宗 3年은 서력1108년, 顯宗 7年은 1016년에 해당한다. 1145년 이전의 宜州에 관해서는 (e)와 마찬가지로, 1108년의 宜州築城을 전하는 기사는 이외에 「高麗史」地理志·東界條, 同·兵志·城堡條, 同·尹璫傳에 보여,¹⁵⁾ 어느 것이든 宜州를 九城, 즉 尹璫이 威興方面의 女眞을 討伐하고 쌓았던 九城의 하나로 한다. 宜州를 尹璫九城의 하나에 포함하는 것은 1108년 宜州築城과 尹璫의 女眞討伐이 同時期였던 것에서 생겼고, 閔漬 「本朝編年綱目」(1317년 撰進)에서는 이미 確認된 誤傳이다.¹⁶⁾ 그러나 築城의 事實自體는 부정할 수 없을 것이다. 또 (f)는 宜州築城을 1016년으로 한다. 이것은 一見 (e)와 矛盾되는 것 같다. 그러나 이외에도 高宗 8(1221)년까지는 同9년에 있어서 宜州

13) 同上, pp.69~72.

14) 拙稿 「新羅末高麗初における東北境外の黑水・鐸勒・達姑の諸族」(「朝鮮學報」197, 2005).

15) 또 宜州에 대해서는 「高麗史」卷80·志80·食貨3·祿俸·外官에도 「仁宗朝定」으로서 宜州副使의 祿俸規定이 보이고, 同·卷82·志36·兵3·州縣軍·東界의 州縣軍一覽表에는 宜州가 보인다. 前者에 대해서는 仁宗(位1123~1148年)朝의 規定에 있다면, 1145年以前의 宜州의 實在을 전하는 것이 되지만, 이 規定은 明宗8~27(1178~1197)년까지의 어느 時點에서의 記錄이라고 한다(蔣中昇 「高麗史」食貨志外官祿條의 批判」旗田藤先生古稀記念會編 「朝鮮歷史論集」上, 龍溪書舍, 1979年, pp.450~454). 後者에 대해서는 州縣軍一覽表의 記錄의 成立年代에 대해 여러 설이 있고, 仁宗代에 상정된다고 하는 見解도 있지만, 어떠한 설도 根據가 있어 쉽게 判斷하기 어렵다고 한다(李基白 「高麗州縣軍考」 「高麗兵制史研究」一潮閣, 1968年, pp.205~206). 게다가 여기에서는 兩史料의 宜州에는 해당되지 않는다.

16) 池內宏 「咸鏡南道咸興郡に於ける高麗時代の古城址」(「大正八年度古蹟調査報告」第1冊, 朝鮮總督府, 1922年)pp.44~47.

築城이 전해져,¹⁷⁾ 종래 이것은 1016년의 宜州創築에 대한 修築으로 보아왔다.¹⁸⁾ (c)도 高宗代의 宜州築城記事와 마찬가지로 修築으로 볼 수 있어, 이들 연차가 다른 宜州築城에 관한 세 기록은 어느 것이나 事實로 볼 수 있다.

그렇다면 「三國史記」에 전하는 湧州의 存在時期와 宜州의 그것과는 중복된다. 「三國史記」의 기록에도 한편은 의문스럽지만, 「高麗史」卷53·志12·五行1에는 「(仁宗)二十三年六月甲申, 大水, 東界文·湧二州, 山崩水涌, 漂沒城門·人戶甚多」라고 있어, 바로 「三國史記」撰進의 해에 湧州에 洪水가 일어났던 것을 전한다. 「三國史記」와 對應하여 湧州의 實在을 전하는 貴重한 記事라 할 것이다. 1145년 당시에 있어서 湧州의 實在을 否定하기는 극히 어렵다. 湧州와 宜州는 서로 다른 땅으로 보지 않으면 안 되지만, 湧州=宜州=宜川郡=德源都護府로 하는 (c)·(d)의 기록을 그대로 따를 수는 없다.¹⁹⁾

宜州가 宜川郡, 德源都護府라는 순으로 改稱되었고, 그것이 現在의 德源으로 보는 것에 별다른 문제는 없다. 한편 泉井郡을 湧州로 하는 기록에 대해서는 다음과 같은 비판이 있다. 즉 「三國史記」地理志는 泉井郡 領縣의 高麗時代에 있어서 所在地를 모두 未詳으로 한다. 그것은 景德王代 이후의 어느 時點부터 이 地域이 오랫동안 靺鞨에 속해있었기 때문이고, 高麗初에 그 땅을 回復했을 때에는 泉井郡의 故地도 所在不明이었다. 新羅時代 朔庭郡(現在 咸鏡南道 安邊, 共和國에서는 江原道에 속한다)은 泉井郡의 隣郡이고, 게다가 高麗時代에 登州(朔庭郡) 隣郡이었던 湧州가 막연히 泉井郡에 해당했다고 한다.²⁰⁾ 확실히 대체로 9세기 전반 이래, 泉井郡 주변은 新羅領域外에 속한다고 보아도 좋다.²¹⁾ 그러나 泉井郡의 所在가 완전히 不明했다면, 그 領縣과 마찬가지로 所在을 未詳으로 한다면 충분하다. 領縣과는 달리 泉井郡을 湧州에 比定한 데에는 그 나름의 理由가 있었다고 생각한다. 게다가 앞서 서술한 데로 湧州를 德源이라고 할 수 없고 그렇다면 湧州는 登州 隣郡은 될 수 없다. 筆者는 泉井郡을 湧州에 比定하는 기록을 믿는다.

다음으로 들켜 바꾸어 泉井郡=湧州의 位置를 생각해 보고 싶다. 다만 高麗時代 湧州의 所在는 不明하다. 그래서 渤海南境과 新羅東北境의 關係에서 泉井郡의 位置를 간접적으로 살펴본다.

먼저 渤海의 日本海側南境을 보면, 이 방면의 渤海의 據點은 南京南海府로, 現在의 咸鏡南道 北青 青海土城에 比定하는 說이 有力하다. 이 南京南海府 管下에는 「吐?浦」가 있었다.²²⁾ 종래 그 위치에 대해서는 여러 설이 있었지만, 南京南海府의 位置關係에

17) 「高麗史」卷82·志36·兵2·城堡, 同卷129·列傳42·顯祖9·崔忠獻附崔怡.

18) 註12)池內論文, pp.43~44.

19) 田中氏は 臨津江河口附近의 新羅 泉井口郡(坡州郡交河面)과 同江上流의 德源과의 地理的對應關係를 根據로, 泉井郡을 德源으로 하는 기록을 인정한다(註9)田中論文, p.58).

20) 註12)池內論文, pp.70~72.

21) 註14)拙稿, pp.15~22.

서 대략의 推測에 머무르고 있다. 그러나 최근 趙炳舜氏는 「吐号浦」가 「吐号浦」의 誤寫로 볼 수 있다는 것을 根據로 「吐号浦」를 都連浦에 比定하여 注目된다.²³⁾ 筆者는 이 견해를 支持한다. 趙氏는 都連浦를 連浦面(共和國에서는 咸州郡 連浦里一帶)으로 하지만, 종래 都連浦는 廣浦(廣湖)에 比定되어 왔다.²⁴⁾ 양자가 近接하므로 問題는 없지만, 일단 渤海南境을 廣浦이남으로 보자.

다음으로 統一新羅의 東北境을 연대에 따라 고찰해 보고 싶다. 먼저 統一新羅時代 그 位置를 명확히 짚을 수 있는 最北方의 郡縣은 比列忽州(朔庭郡, 安邊)이다. 比列忽州는 「三國史記」卷6·新羅本紀6·文武王 8(668)년 조에,

三月, (中略), 置比列忽州, 仍命波珍?龍文爲總管.

이라고 있어, 668년에 復置되었다.²⁵⁾ 이어서 이하의 기사가 보인다.

(a) 「三國史記」卷7·新羅本紀7·文武王上

(十五年秋九月二十九日)緣安北河設關城, 又築鐵關城.

(b) 「三國遺事」卷2·文虎王法敏

(前略)安北河邊築鐵城.

(b)는 繫年이 결여되었지만 (a)에 對應하는 記事로 보아도 좋다. (a)·(b)에 의하면, 675년에 安北河를 따라 關城·鐵關城·鐵城(이하 鐵關城으로 代表한다)등으로 불리는 軍事施設이 設置되었던 것을 알 수 있다. 그 위치에 대해서는 후세에 鐵關이라는 地名이 咸鏡南道 方面에 散見되므로, 일단 대략 新羅東北境 方面으로 보아도 좋다. 구체적으로 池內氏는 먼저 (a)의 「鐵關城」을 「新增東國輿地勝覽」 德源郡護府·古跡條 등에 보이는 「鐵關」에 해당하여 德源邑의 북쪽 약 6km의 望德山에 있는 古城址로, 다음에 安北河를 德源의 북쪽을 따라 北面川에 比定하고, 더욱이 「關城」을 望德山 및 北面川의 남쪽에 있는 다른 望德山(小望德山)에 해당하지만,²⁶⁾ 李成市氏에 의하면, 이들 三者는 동일한 城을 가리키는 名稱일 것이라고 한다.²⁷⁾ 이상 池內氏의 比定은 泉井郡=湧州=德源說에 의한 것으로, 그 當否의 判斷을 지금은 일단 保留한다. 그리고 이후 (b)에 의하면 681년에 泉井郡이 獲得되었다. 그렇다면 鐵關城과 泉井郡의 位置關係는 前者를 쌓은 후에 그 內側에 後者를 「취했다」고는 이해하기 어려우므로 新羅領內에서 보아 前者가 內側, 後者가 보다 外側이 될 것이다.

다만 (b)의 681년에 시작하여 泉井郡을 「취했다」고 하는 記事를 의심하는 의견²⁸⁾이

22) 「續日本紀」卷34·光仁天皇·寶龜8(777)年正月癸酉條에 渤海使史都蒙의 言로서 「由是, 都蒙等, 發自弊邑南海府吐号浦, 西指對馬島竹室之津」이라고 있다.

23) 趙炳舜 「渤海南京南海府의 位置推定에 對한 考察」(「書誌學報」28, 2004年).

24) 池內宏, 「高麗朝に於ける東女眞の海寇」(「滿鮮史研究」中世第2冊, 吉川弘文館, 1979年)p.309.

25) 이 이전의 比列忽의 沿革에 대해서는 註12) 池內論文, pp.16~30참조.

26) 註12)池內論文, pp.42~44.

27) 李成市, 「八世紀新羅·渤海關係の一視角」(「古代東アジアの民族と國家」岩波書店, 1998年), pp.395~396.

28) 註9)田中論文, p.56.

있다. 실은 『三國史記』卷6·新羅本紀6·文武王下에,

(i) (九(669)年)夏五月, 泉井比□□□連等, 三郡民饑, 發倉賑恤.

이라고 보이기 때문이다. 下線部는 「泉井比[列][列]各連」으로 補正²⁹⁾할 수 있고, 그렇다면 669년에는 이미 泉井郡은 新羅領이었다는 것이 된다. (b)와 (i)는 矛盾되고, 그리고 (i)가 옳다면 역지로 泉井郡의 位置를 鐵關城 外側에서 구할 必然性은 없어지는 것이다.

이 문제를 생각하는데 참고가 되는 것이 『三國史記』卷7·新羅本紀7·文武王11(671)년 조에 실린 文武王이 唐將 薛仁貴에게 보낸 書의 一節이다. 거기에는,

又卑列之城, 本是新羅, 高麗打得三十餘年, 新羅還得此城, 移配百姓, 置官守捉, 又取此城, 還與高麗.

라고 있다. 「卑列之城」는 比列忽州이다. 이 一節은 比列忽州이 원래 新羅領이었던 것을 根據로 거기까지 進出한 正當性을 新羅가 唐側에 主張한 것이다.³⁰⁾ 그러나 下線部에는 唐이 比列忽州을 高句麗에 주려고 했다고 하고 있다. 唐은 新羅에 政治的 壓力을 가하고 있었기 때문이다. 게다가 671년時點에서 新羅는 比列忽州까지를 지켜야만 하는 自己領域이라고 認識하는 한편, 泉井郡을 포함한 比列忽州 이북은 唐의 政治的 壓力으로 일시적으로 空白地帶가 되었다고 생각하고 있었다. 唐의 高句麗征伐에 편승해 669년경, 일시적으로 泉井郡까지 進出했던 新羅는 671년경에는 比列忽州까지 後退, 그 후 675년에 鐵關城을 쌓고, 그 外側에 있는 泉井郡을 681년에 다시 취했다고 할 수 있을 것이다.

다음으로 泉井郡에 쌓았던 (b)의 「炭項關門」에 대해 보자. 먼저 그 位置에 대해서는 대략 泉井郡의 外側이라고 간주해도 좋다. 다음에 築造年代에 대해서는 681년 설과 757년 설이 있다. 池內氏는 681년 新羅의 泉井郡奪取 때의 築造라고 하지만, 그렇다면 (b)에서 「取之」와 「景德王改名」의 사이에 「築炭項關門」이라는一句가 들어가야 할 것이다. 681년 설은 의문이다. 한편 宋基豪氏는 「景德王改名」을 「築炭項關門」까지 걸쳐 景德王 16(757)년의 郡縣改稱 때의 築造로 본다.³¹⁾ 날카로운 指摘이지만 「景德王改名」의一句는 「三國史記」地理志에 頻出하는 定型句이고, 그것이 「築炭項關門」까지 걸친다고는 생각하기 어렵다.³²⁾ 757년 설에도 疑問이 남는다. 筆者는 炭項關門을 「三國史記」卷8·新羅本紀8·聖德王20(721)년 조에,

秋七月, 徵何瑟羅道丁夫二千, 築長城於北境.

29) 李丙壽校譯, 『三國史記』原文篇(乙酉文化社, 1977年), p.65.

30) 古畑徹, 「後期新羅・渤海の統合意識と疆域觀」(『朝鮮史研究會論文集』36, 1998年), pp.27~29.

31) 宋基豪, 「東아시아 國際關係 속의 渤海와 新羅」(『韓國史市民講座』5, 一潮閣, 1989年), p.48.

32) 註12)池內論文, pp.46~47.

라고 하는 「長城」으로 본다. 何瑟羅는 現在의 江原道 江陵市이다. 그 丁夫들 徵發하여 北境에 「長城」을 쌓았다고 한다. 721년 당시의 北境은 泉井郡이고, 關門은 長城으로 간주할 수 있으므로³³⁾ 이 「長城」과 炭項關門을 연결할 수 있다. 炭項關門의 築造年代는 721년일 것이다.

이상 統一新羅의 東北境에 대해 考察했다. 그 결과 남쪽에서부터 比列忽州(安邊)→鐵關城·安北河→泉井郡→炭項關門이 位置했던 것을 알았다. 앞서 서술한 바와 같이 渤海南境은 廣浦이남이므로 泉井郡은 安邊·廣浦間에 位置한 것이 된다. 그리고 新羅와 渤海의 境界에 대해서는 「新唐書」卷219·列傳144·北狄·渤海에 「南比新羅, 以泥河爲境」이라고 있다. 泥河에 대해서는 龍興江, 金津川, 南大川, 江陵市連谷面の 連谷川 등으로 하는 의견이 있지만,³⁴⁾ 南大川은 安邊에 너무 가깝고, 連谷川은 도대체 新羅領內에 깊이 들어가 있었다고 해도 疑問이다. 廣浦이남, 安邊이북에서 國境을 정한 것에 相應해 河水는 金津川 또는 龍興江이다. 또 泥河와 新羅最北端의 炭項關門의 位置關係는 關門이 國境의 河川 外側에 位置했다고는 생각하기 어렵기 때문에 新羅領에서 보아 泥河가 外側, 炭項關門이 內側이었을 것이다. 이상을 念頭에 두고, 이하 2개의 河川 각각을 基點으로 泉井郡의 位置를 고찰해 보고 싶다.

먼저 泥河를 金津川으로 볼 경우 앞에서 서술했던 池內氏의 考證이 參考가 된다. 다시 말하지만 池內氏는 721년 築造의 「長城」을 龍興江과 金津川의 分水山脈에 있는 永興郡의 古長城에 比定하고, 그 分水山脈의 산마루에 있는 金陂嶺에 炭項關門이 있다는 것이다. 더욱이 그것과의 位置關係에서 泉井郡=湧州라는 기록을 否定하고, 泉井郡을 和州(永興)라고 한 것이다.³⁵⁾ 그러나 앞서 서술한 바와 같이 泉井郡=湧州라는 기록은 믿을 수 있다. 또 그것을 否定할 수 없다고 해도 德源說을 벗어나 泥河(金津川) 및 「長城」·炭項關門의 位置關係에서 泉井郡을 永興周邊으로 比定할 수 있다. 泉井郡候補地의 하나로 永興周邊을 들 수 있다. 다만 「高麗史」卷80·志80·食貨3·賑恤에는,

(기) (宣宗)十一(1094)年二月, 以東路高·和·文·湧·定·長·登·交等八州, 宣德·元興·寧仁·長平·永興·龍津等大鎮, 因往年水旱, 民多飢餓, (後略)

라고 있어, 和州와 湧州가 동시에 보인다. 게다가 양자는 다른 땅이라 할 것이다. 앞에서 永興周邊이라고 했던 것은 그 때문이다.

다음으로 泥河를 龍興江으로 볼 경우, 그 이남에 두드러진 톱으로는 咸鏡南道 高原, 文川(舊文川, 共和國에서는 江原道에 속한다)을 들 수 있다. 그러나 高原은 平野에 位置하고 있고 「長城」 및 炭項關門은 山地에 쌓았다고 볼 수 있으므로(後述) 地勢上 조

33) 註27)李論文, p.395.

34) 龍興江說は, 註8)松井論文, pp.422~425, 鳥山富一 「渤海史上の諸問題」(風間書房, 1968年), p.167など, 金津川說は, 註12)池內論文, pp.68~69, 南大川說は, 津田左右吉 「新羅北境考」(「津田左右吉全集」第11卷, 岩波書店, 1964年), pp.226~228, 連谷川說は, 徐炳國 「新唐書渤海傳所載 泥河의 再檢討」(「東國史學」15, 16, 1981年), pp.254~256.

35) 註12)池內論文pp.49~70.

금 어울리지 않는다. 다음으로 文川에 대해 보면 『高麗史』卷82·志36·兵2·站驛에,

(k)朔方道掌四十二 (中略)追風【霜陰】鐵關 通達【高州】和遠【和州】德嶺【文州】
(下略)

라고 있는 것이 주목된다. 高州(高原)에 속하는 2개의 驛의 하나에 鐵關驛이 있다고 한다. 池內氏에 의하면 (k)를 포함하는 站驛條의 기사는 道名·州名·驛名 등에 의해 생각해 보면, 주로 高麗朝 중세의 狀態를 전한다고 한다.³⁶⁾ 여기에서 池內氏는 (k)의 鐵關驛을 德源望德山の 鐵關에 관련하는 것으로 斷定한다.³⁷⁾ 그러나 德源·高原間에는 文川이 位置한다. (k)에는 文州(文川)에 속하는 驛도 보여, 만약 (k)의 鐵關驛이 德源望德山附近에 있다면, 文州에 속할 것이다. 高麗後期~朝鮮時代 德源의 鐵關과 高麗 중세 이전의 鐵關은 다른 땅이었을 것이다. (k)의 鐵關驛의 位置를 高原·文川 사이에서 찾아보고 싶다. 炭項關門을 (k)의 鐵關驛附近으로 생각해 前面이 山地로 遮斷되는 地勢를 찾아보면, 南川江支流의 分水山脈이 눈에 띈다. 그 산마루에 泥峴이 있다. 炭項關門을 泥峴에 比定하는 試案을 提示해 두고 싶다. 따라서 泉井郡=湧州의 所在은 그 이남이 된다. 文川周邊을 또 하나의 泉井郡候補地로 추정할 수 있다. 다만 (j)를 시작으로 文州와 湧州(泉井郡)가 동시에 보이는 예가 『高麗史』에 된다. 따라서 양자도 또 각각의 다른 땅이 된다.

마지막으로 앞서 保留했던 池內氏의 安北河 및 鐵關城에 대한 位置比定의 當否에 대해 언급해 둔다. 이제까지의 考察에 의하면, 泉井郡의 位置는 永興周邊 또는 文川周邊 일 것이다. 앞서 서술한 것처럼 新羅東北境에는 남쪽에서부터 比列忽州(安邊)→鐵關城·安北河→泉井郡(永興周邊 혹은 文川周邊)→炭項關門이 位置하고 있어 安北河를 北面川으로, 鐵關城을 德源望德山에 比定하는 池內氏의 見解는 여기에 비추어 볼 때 不自然스러운 것은 아니다. 筆者는 池內氏의 安北河 및 鐵關城에 대한 位置比定을 일단 妥當하다고 생각한다.

III. 新羅東北境에 있어서 新羅와 渤海의 交渉³⁸⁾

그렇다면 新羅東北境地域에 있어서 新羅와 渤海의 交渉은 어떤 것이었을까? 이 문제들을 고찰하기 위해 本節에서는 주로 먼저 첫째 양국 境界의 交通路의 實態를 밝히고, 交渉의 有無를 檢證한다. 다음으로 둘째 新羅·渤海接壤地域의 住民構成과 그 내력 그리고 그들의 他者認識을 언급하고, 마지막으로 이 地域의 양국 領域民에 의한 交渉의

36) 同上, p.44.

37) 同上.

38) 이하 本節의 記述은 주로 註(7) 및 註(14)前掲拙稿에 기초한다. 詳細한 것은 이들 拙稿를 참조하고 싶다.

형태를 언급하고 싶다.

먼저 첫 번째를 고찰하는데 단서가 되는 것이 前掲史料(a)이다. (a)는 渤海柵城府~泉井郡사이의 驛路의 存在를 전하고, 이것은 「新唐書」渤海傳의 「新羅道」에 해당한다고 생각된다. 이러한 交通路의 存在에서 新羅東北境에 있어서 新羅와 渤海의 恒常의인 交涉를 想定하는 의견이 있다.³⁹⁾ 게다가 (a)는 本稿의 과제에 대한 重要한 기록이지만, 종래 그 史料의 性格에 충분히 注意를 기울여왔다고는 할 수 없다. 그러므로 筆者의 견해에 따라 (a)의 史料의 性格을 再確認해 두고 싶다.

먼저 (a)의 「賈耽古今郡國志」에 대해 보면 賈耽(730~805年)은 唐 滄州南皮(現在の河南省南皮)의 사람으로 貞元 (785~805)연간에 宰相이 되고, 地理·陰陽에 精通해 많은 地理書를 남겼다. 그 저서에 「古今郡國縣道四夷述」 40권이 있어 貞元 17(801)년 11월에 表獻되었다. 同書는 여러 책에 다양한 名稱으로 引用되고 있어 「賈耽古今郡國志」는 「古今郡國縣道四夷述」이라고 보아도 좋다.⁴⁰⁾

그런데 실은 「三國史記」地理志에는 (a)이외에도 여러 곳에 「古今郡國縣道四夷述」가 引用되었다. 다음에 그들도 아울러 檢討하고, (a)의 史料의 性格을 吟味해보자.

- (1) 新羅疆域. (中略). 賈耽四夷述曰. 「辰韓. 在馬韓東. 東抵海. 北與濊接」.
- (a) 朔州. 賈耽古今郡國志云. 「句麗之東南. 濊之西. 古貊地. 蓋今新羅北朔州」.
- (b) 溟州. (中略). 賈耽郡國志云. 「今新羅北界溟州. 蓋濊之古國. 前史以扶餘爲濊地. 蓋誤」.

(1)의 「賈耽四夷述」도 「古今郡國縣道四夷述」로 보아도 좋다. 이들 「古今郡國縣道四夷述」 逸文⁴¹⁾ 외에 「古今郡國縣道四夷述」의 記述一般과 (a) 및 (1)~(b)下線部の 特徵으로 다음의 세 가지를 들 수 있다. 첫째 「古今郡國縣道四夷述」은 史料成立時點의 現在地名을 說明하는 것을 최대의 목적으로 하고, 그 때문에 과거의 沿革을 집어볼 필요가 있다. 게다가 現在地名이 결여된 (1)에는 「辰韓」으로 說明된 現在地名을 想定할 수 있어, 내 생각으로는 이것이 新羅王城(慶尙南道慶州市)이다. 이것을 근거로 들 때는 (a) 및 (1)~(b)下線部가 어떤 使者에 의해 日本海沿岸使行 때의 情報을 기초로 한 一連의 史料라고 생각되는 점이다. (a) 및 (1)~(b)下線部に 登場하는 地名은 渤海南海府, 鴨渚府(吉林省臨江), 扶餘府(同慶安), 柵城府~新羅泉井郡의 驛路, 新羅王城, 朔州(江原道春川市), 溟州(同江陵市)이다. 특히 南海府 및 柵城府 이하는 모두 日本海沿岸地域으로 이들 地點을 연결하면 柵城府에서 新羅王城에 이르는 하나의 交通路와 같다(地圖 2 參照). 이러한 登場地名에 기울이면 생생한 驛路의 情報라는 이들 地域의 實際 通過에 기초한다

39) 朴時亨, 「渤海史研究のために」(旗田巍·井上秀雄編 「古代朝鮮の基本問題」, 學生社, 1974年), pp.161~165, 註31)宋論文 pp.47~49, 旗田耕策a 「迎賓機構」(註6)旗田前掲書), pp.154~155, 同 b 「渤海國の京府州郡縣制の整備と首領の動向」(「白山學報」52, 1999年), p.773 등.

40) 櫻一雄, 「賈耽の地理書と道里記の稱とに就いて」(「櫻一雄著作集」第7卷, 汲古書院, 1994年), pp.194~195.

41) 실은 이외에도 「古今郡國縣道四夷述」를 간접적으로 引用한 글이 「三國史記」地理志에 存在하지만 지금은 언급하지 않는다.

고 생각한다. 그리고 셋째 (a) 및 (1)~(v)下線部가 757년 12월~801년 11월까지의 實情을 전하는 記事라는 점이다. (a)·(v)의 朔州·溟州는 757년 12월 景德王의 郡縣改稱後의 地名⁴²⁾이고, 또 앞서 서술한 것처럼 『古今郡國縣道四夷述』의 表獻은 801년 11월이기 때문이다.

이상과 같이 (a) 및 (1)~(v)下線部의 特徵을 理解한 위에 아울러 주목되는 것은 本稿 처음에 언급한 賈耽 『道里記』의 「登州海行入高麗·渤海道」이다.

(o) 登州東北海行. 過大謝島·龜欽島·末島·烏湖島三百里. 北渡烏湖海. 至馬石山東之都里鎮二百里. 東傍海嶺. 過青泥浦·桃花浦·杏花浦·石人任·囊駝灣·烏骨江八百里. 乃南傍海嶺. 過烏牧島·貝江口·椒島. 得新羅西北之長口鎮. 又過秦王石橋·麻田島·古寺島·得物島. 千里至鴨綠江唐恩浦口. 乃東南陸行. 七百里至新羅王城. 自鴨綠江口舟行百餘里. 乃小舫舫流東北三十里至泊汜口. 得渤海之境. 又舫流五百里. 至九都縣城. 故高麗王都. 又東北舫流二百里. 至神州. 又陸行四百里. 至顯州. 天寶中王所都. 又正北如東六百里. 至渤海王城.

賈耽 『道里記』란 실은 『皇華四達記』이고, 『皇華四達記』란 『古今郡國縣道四夷述』의 四夷述部分을 單行으로 한 것이라고 한다.⁴³⁾ 결국 (o)와 (a) 및 (1)~(v)下線部란 모두 「古今郡國縣道四夷述」의 逸文이기 때문이다. 게다가 (o)는 唐의 登州(現在의 山東省蓬萊)에서 新羅王城과 渤海王城(黑龍江省寧安東京城)에 이르는 두 루트를 기록했지만 그 양 終點이 (a) 및 (1)~(v)下線部에서 復元되었던 日本海沿岸 루트에 接續하고(地圖 2 參照). 또 (o)가 전하는 내용은 757년 12월~801년 11월의 것으로 보아도 矛盾되지 않는다. (o)와 (a) 및 (1)~(v)下線部의 記事는 一連의 記事로 볼 수밖에 없기 때문이다. 그리고 그것은 8世紀中葉에 唐~渤海~新羅~唐의 東아시아 使行을 담당했던 唐의 敕使 韓朝彩의 견문에 기초한 기사로 그 使行루트의 痕跡을 적고 있다⁴⁴⁾고 생각된다.

韓朝彩에 대해서는 『續日本紀』卷25·淳仁天皇·天平寶字8(764)년 7월 조에,

○甲寅. 新羅使大奈麻金才伯等九十一人. 到着大宰博多津. 遣右少弁從五位下紀朝臣牛養. 授刀大尉外從五位下栗田朝臣道麻呂等. 問其由緒. 金才伯言曰. 「唐國勅使韓朝

42) 다만 (a)下線部의 「泉井郡」은 郡縣改稱前의 地名이다. 宋氏は 여기에서(a)下線部를 757년 이전의 것을 전하는 史料라 한다(註31)宋論文, p.48). 이 점에 대해서 筆者는 以前 「泉井郡」을 「井泉郡」의 잘못이라고 생각했다. 그러나 후술하는 것처럼 (a)下線部는 762~764년 경의 것을 전하는 史料로 볼 수 있고, 덧붙여 泉井郡은 新羅領東北端이다. 게다가 757년 11월부터 곧 最邊境의 泉井郡에서는 改稱地名의 使用이 徹底하지 않았다고 생각할 수 있다(木村談先生の 敍示). 또 처음부터 「泉井」과 「井泉」은 泉도 井도 같은 뜻이므로 訓으로 「열」이라고 읽어(梁柱東, 「增訂古歌研究」, 一潮閣, 1965年, 142頁)通用했다고도 생각할 수 있다.

43) 註40)續論文, pp.197~200.

44) 田中氏は (a)의 朔州를 韓朝彩의 使行루트에서 除外하고, 韓朝彩는 新羅五通의 하나 「北海通」를 利用하여, 泉井郡에서 直接日本海沿岸을 南下하여 溟州. 新羅王城에 이르렀다고 한다(註9)田中論文, 62~67頁). 또 田中俊明 「新羅の交通體系に對する豫備的考察」(『朝鮮古代研究』5, 2003年)참조.

彩, 自渤海來云, 「送日本國僧戒融, 令達本鄉已畢, 若平安歸鄉者, 當有報信, 而至于今日, 寂無來音, 宜差此使, 其消息欲奏天子」, 仍齎執事牒參大宰府, 朝彩者, 上道在於新羅西津, 本國謝恩使蘇判金容, 爲取大宰報牒寄附朝彩, 在京未發」, (中略), 及其歸日, 大宰府報牒新羅執事曰, 「檢案內, 被乾政官符傳, 「得大宰府解傳, 〈得新羅國牒傳, 依韓內常侍讀, 欲知僧戒融達不〉, 府具狀申上者」, 以去年十月, 從高麗國, 還歸聖朝, 府宜承知即令報知」」.

라고 있어, 764년까지 唐에서 渤海를 거쳐 新羅에 이르고 있는 것을 알 수 있다. 그 唐 출입은 762년경일 것이다. 韓朝彩가 寶應元年(762)의 大欽茂 冊封 때의 冊封使로 보여, 그 繫年은 冊書가 나왔던 時點이라고 생각되기 때문이다.⁴⁵⁾ (o) 및 (a)?(1)~(u)下線部の 情報과 이러한 대략 762~764년에 걸치는 韓朝彩의 극히 特殊한 東아시아 使行을 연결 짓는 것은 결코 不當한 것은 아닐 것이다.

(a)는 韓朝彩가 渤海에서 新羅로 新羅東北境을 陸路通過할 때의 견문에 기초한 史料로 생각된다. 이렇게 (a)의 史料的 性格을 확인해 보면, 다음의 두 가지를 指摘할 수 있다. 먼저 확실히 新羅東北境에 있어서 新羅·渤海 양국 境界를 사람들이 通過했고, 양국 境界는 完全히 遮斷되었을 리 없다는 것이다. 다음으로 渤海에서 新羅로 통하는 新羅道에 驛을 設置·整備하고 新羅道를 重視하고 있었다는 것이다.

게다가 (a)에서 新羅·渤海 양 국가간의 友好的이고 頻繁한 交涉을 간파하는 의견도 一應 그렇기 하지만, 한편 다음에 제기하는 史料에 의해 양국은 新羅東北境에서 날카로운 緊張關係였다고 하는 의견도 무시할 수 없다. 그러므로 다음으로 이 점에 대해 생각해 보고 싶다.

(p) 「新唐書」卷220·列傳145·東夷·新羅

新羅, 弁韓苗裔也. 居溟樂浪地, 橫千里, 縱三千里, 東拒長人, 東南日本, 西百濟, 南瀕海, 北高麗. (中略). 長人者, 人頗長三丈, 鯨牙鉤爪, 黑毛覆身, 不火食, 噬禽獸, 或搏人以食, 得婦人, 以治衣服, 其國連山數十里, 有峽, 固以鐵闔, 號關門, 新羅常屯弩士數千守之.

(p)는 「新唐書」新羅傳의 소위 長人記事로 여기에 대해서는 李成市氏의 精細한 研究가 있다.⁴⁶⁾ 거기에 의하면 (p)는 실은 「太平廣記」卷481·新羅에도 인용된 牛肅 「紀聞」을 典據로 한다. 「紀聞」도 아울러 長人記事의 내용은 天寶2(743)년경 新羅의 일부 國內事情을 전한다고 하지만, 내 생각으로는 좀더 후의 8세기 중엽의 일을 포함한다고 생각된다. 그리고 長人記事는 720~750년대에 걸쳐 新羅와 渤海의 國際的 緊張을 背景

45) 馬一虹 「八世紀中葉の渤海と日本の關係」(「國學院大學大學院紀要文學研究科」29, 1998年), pp.265~269. 또 韓朝彩에 대해서는 丸山裕美子, 「唐國勅使韓朝彩についての覺書」(「續日本紀研究」290, 1994年)도 참조.

46) 註27)李論文.

으로 하여 軍事施設을 사이에 두고 국경을 접하는 渤海領域民에 대한 恐怖心에서 新羅인이 품은 다른 이미지를 전하는 것으로 그 후에도 新羅人과 渤海領域民의 交渉은 緊密하지 않았다고 한다.

앞서 본 것처럼 (a)의 情報은 더욱이 764년경, 渤海에서 新羅로 新羅東北境을 陸路通過했던 韓朝彩에 의해 收集되었다. 韓朝彩가 (p)에 언급한 것 같이 軍事的 緊張지역을 通過할 수 있었던 것은 그가 唐의 勅使였던 것 이외에는 없다. (a)의 情報은 그러한 背景을 염두에 두고 이해해야만 하고, 거기에서 바로 渤海·新羅 양 국가간의 友好的이고 頻繁한 交渉을 想定하기는 어렵다.

다만 앞서 서술한 것처럼 양국 境界는 완전히 遮斷되어 있던 것만은 아니었다. 확실히 (p)와 對應하는 「紀聞」에는 「其境 限以連山數千里 中有山峽 固以鐵門 謂之鐵關 常使弓弩數千守之 由是不過」라고 있어, 특히 下線部에서는 新羅가 境界의 通過를 엄격히 管理하고 있던 것을 언급했다. 그러나 前節에서 본 咸鏡南道地域의 新羅와 渤海의 境界는 이미 指摘된 것처럼 三國時代에 高句麗와 新羅의 境界였다거나, 相互 交渉이 없던 地域이었다거나 한 것이 아니라, 예전에 이 地域의 居民이었던 濊族에 대해서는 必然性이 없는 것이었다.⁴⁷⁾ 그렇다면 예를 들어 국가간의 交渉은 없었다고 해도 그 地域의 居民에 의해 양국 境界의 往來는 그러저럭 存在했던 것은 아닐까?

그러면 바꾸어 長人記事대해 보면 주목되는 것은 여기저기 事實을 反映했다고 생각되는 부분이 보인다는 점이다. 먼저 (p)에 보이는 食人譚에 대해서는 8세기 증업을 記述 對象年代로 한다고 하는 티베트어 文書(P.1283)에 渤海를 가리켜 Mug-lig=Ke'u-li에는 人肉을 먹었다고 전해진다.⁴⁸⁾ 다음으로 禽獸를 먹는 것에 대해서는 勿吉·靺鞨의 習俗으로, 肉虎살로 禽獸를 쏘기도 하고, 돼지를 길러 그 고기를 먹고, 가죽을 입었던 것이 전해진다.⁴⁹⁾ 또 검은 털로 몸을 덮은 것은 毛皮의 着用을 가리킨다고 생각된다. 毛皮의 着用에 대해서는 앞서 서술한 돼지가죽의 着用 외에 渤海使가 貂·虎·鼯 등의 毛皮를 日本이나 唐에 貢獻하고 있고, 특히 日本에서는 渤海의 黑貂皮가 珍重되고 있던 것이 전해진다.⁵⁰⁾ 더욱이 「紀聞」에는 長人이 「醇酒」를 내어 연회를 열었다고 하지만, 勿吉·靺鞨에 있어서 飲酒는 中國史書에 特筆된다.⁵¹⁾ 長人은 身長三丈(約9m)이고, 뚝과 같은 이, 갈고리 같은 손톱을 가졌다는 등 하는 描寫로 시작하는 長人記事全體를 보면, 확실히 現實的으로는 없는 불가사의한 觀念的 記事라는 것이 된다. 그러나 이상과 같은 長人記事의 내용과 渤海人 혹은 勿吉·靺鞨人의 習俗과 일치하는 것은

47) 李成市 「渤海史をめぐる民族と國家」(『歴史學研究』626, 1991年), 17~18.

48) 森安孝夫a, 「チベット語史料中に現れる北方民族」(『アジア・アフリカ言語文化研究』14, 1977年)pp.3~4 및 pp.9~13, 同b 「シルクロードと唐帝國」(講談社, 2007年)pp.316~334.

49) 禽獸를 쏘는 것에 대해서는 「魏書」卷100·列傳88·勿吉, 「北史」卷94·列傳82·勿吉, 「隋書」卷81·列傳46·東夷·靺鞨 등, 돼지를 養育한 것에 대해서는 「舊唐書」卷199下·列傳149下·北狄·靺鞨, 「唐會要」卷96·靺鞨 등.

50) 龍川政次郎 「滿洲土產黑貂裘」(『滿支史說史話』日光書院, 1939年)pp.141~148.

51) 「魏書」勿吉傳, 「北史」勿吉傳, 「隋書」靺鞨傳, 「通典」卷186·邊防2·東夷下·勿吉 등.

新羅人이 渤海領域民과 어느 程度의 接觸을 갖고, 그들에 관한 情報을 가지고 있던 것을 나타낸다고 생각한다.

이상 新羅와 渤海의 境界에 있어서 양국 領域民의 交渉이 확실히 存在하고 있던 것을 보았다. 그러면 다음에는 本節 처음에 들었던 들깨 문제에 대해 생각해 보자.

첫째로 新羅·渤海接壤地域의 住民構成과 그 내력, 그리고 그들의 他者認識에 대해 보면 먼저 長人으로 描寫된 渤海領域民이란 黑水·鐵利(鐵勒)·達姑(達姑) 등 北部靺鞨諸族을 가리킨다고 생각한다. 新羅末高麗初가 되던 新羅東北境에 있어서 이들 諸族의 活動이 散見된다. 내 생각에는 9세기 말의 그 활동은 部落名을 따르는 등 自立性을 가지면서도, 어디까지나 渤海의 支配秩序의 틀 안이었다. 따라서 그 이전에 이들 諸族은 멀리 松花江·黑龍江流域의 본래 住地에서 渤海에 의해 옮겨졌다고 보아도 좋다. 그리고 達姑에 대해서는 자세하지 않지만, 黑水·鐵利에 대해서는 적어도 그 일부가 740년대까지 渤海에 服屬해 있었다는 것을 確認할 수 있다.⁵²⁾ 長人記事에는 渤海領域民에 대한 新羅人의 異形·異類觀이 反映되어 있다. 옛날에 이 地域에 居住하고 있던 濊族은 新羅人에게 오랫동안 國境을 접해 比較的 近한 存在였을 것이다. 게다가 이러한 異形·異類觀은 新羅東北境에서 地理的으로 멀리 떨어져, 이제까지 未知의 存在였던 北部靺鞨諸族에 대해 보는 것에야말로 어울린다고 생각한다. 덧붙여 앞서 서술한 것처럼 長人記事의 內容이 渤海成立이전의 勿吉이나 靺鞨, 黑水靺鞨의 習俗으로 전해지는 것과 共通되는 것도 注意된다. 長人을 黑水·鐵利(鐵勒)·達姑(達姑) 등의 北部靺鞨諸族으로 보아도 좋을 것이다.

한편 다음에 長人에 대해 異形·異類觀을 품고 있던 新羅人이라는 경우의 新羅人의 實體에 대해 생각해 두고 싶다. 그러면 注目되는 것은 (P)에서 長人을 新羅의 동쪽이라고 하는 그 方位觀이다. 統一新羅時代 新羅東北境에 대한 方位觀은 북쪽이기 때문에 이것은 關門 결국 新羅東北境地域을 基點으로 한 것으로 보아도 좋다.⁵³⁾ 또 長人記事에는 新羅의 邊境防備에 관한 극히 特殊具體的인 描寫가 보인다. 長人記事가 中國史料인 것은 勿論이지만, 이것은 新羅東北境의 現地情報에 기초한 記事로 생각된다. 게다가 長人에 대한 異形·異類觀을 품었던 新羅人이란 新羅東北境住民이었으므로, 그것은 濊族일 것이다. 長人記事는 渤海에 의해 遷徙되었던 北部靺鞨諸族에 대한 新羅東北境住民의 他者認識이라는 것이다. 또 濊族은 新羅와 渤海 각각에 編入되었지만 예를 들어 나라를 달리했다고는 말할 수 있지만 스스로와 種族系統을 같이하는 新羅東北境에 가까운 栗末·白山 등의 南部靺鞨諸族⁵⁴⁾에 대해, 異形·異類觀을 품었다고는 생각하기 어렵다. 이 점에서 長人은 北部靺鞨諸族이라 볼 수 있다.

52) 黑水에 대해서는 註4)古畑論文pp.58~59, 鐵利에 대해서는 「續日本紀」卷16·天平18(746)年是年 조에, 渤海人을 따라 日本에 來朝했던 것이 보인다.

53) 李柱主(27)論文, p.395.

54) 權五重 「靺鞨의 種族系統에 관한試論」(『震檀學報』49, 1980年), pp.6~24.

그리고 둘째 이러한 新羅·渤海接壤地域에 있어서 交渉의 형태에 대해 마지막으로 언급하고 싶다. 前節에서 본 것처럼 新羅와 渤海는 泥河를 境界하고 그 內側に 新羅는 炭項關門(長城)을 두고 있다. 그 狀況은 8세기 중엽과 마찬가지로였다고 생각된다. (P)의 長人記事에 보이는 山峽의 關門이란 炭項關門에 해당한다 할 것이다.⁵⁵⁾ 그렇다면 長人 즉 渤海에 의해 遷徙되었던 黑水·鐵利·達姑의 北部靺鞨諸族은 境界의 泥河를 넘어 炭項關門까지의 新羅領에 侵入하고 있던 것이 된다(圖1參照). 결국 泥河에서 炭項關門까지의 地域은 公式적으로는 新羅領이었어도 渤海領域民의 侵入이 可能했던 것이다. 한편 (P)나 「紀聞」에 보이는 長人の 남치 등의 活動은 組織的인 것이라고는 생각할 수 없다. 北部靺鞨諸族을 遷徙했던 渤海도 邊境에 그들의 自立的 活動을 허락하고 있던 것이 實情이었다.

이렇게 新羅領이면서 渤海支配下의 北部靺鞨諸族의 侵入을 허락하고, 한편에서 그들의 自立的 活動을 許容하고 있던 渤海의 邊境支配에서 볼 때, 新羅·渤海兩國의 境界인 泥河附近을 일종의 緩衝地帶로 간주할 수 있을 것이다. 이러한 緩衝地帶에 있어 頻繁하지는 않아도 渤海領域民과 新羅領域民이 接觸을 가지고 있었다고 하는 것이 新羅·渤海接壤地域에 있어서 交渉의 형태였기 때문이다. 그리고 이러한 交渉은 後代에 있어서 東·西女眞과 高麗 사이의 活潑한 交渉⁵⁶⁾의 史的前提였다고 생각된다.

IV. 맺음말

統一新羅時代의 東北端의 邑인 泉井(井泉)郡의 位置는 永興周邊 혹은 文川周邊이라 할 수 있다. 그 外側에는 山峽을 利用하여 쌓은 長城 즉 炭項關門이 있고, 더욱이 그 外側の 泥河로써 渤海와의 境界를 긋고 있었다고 생각된다.

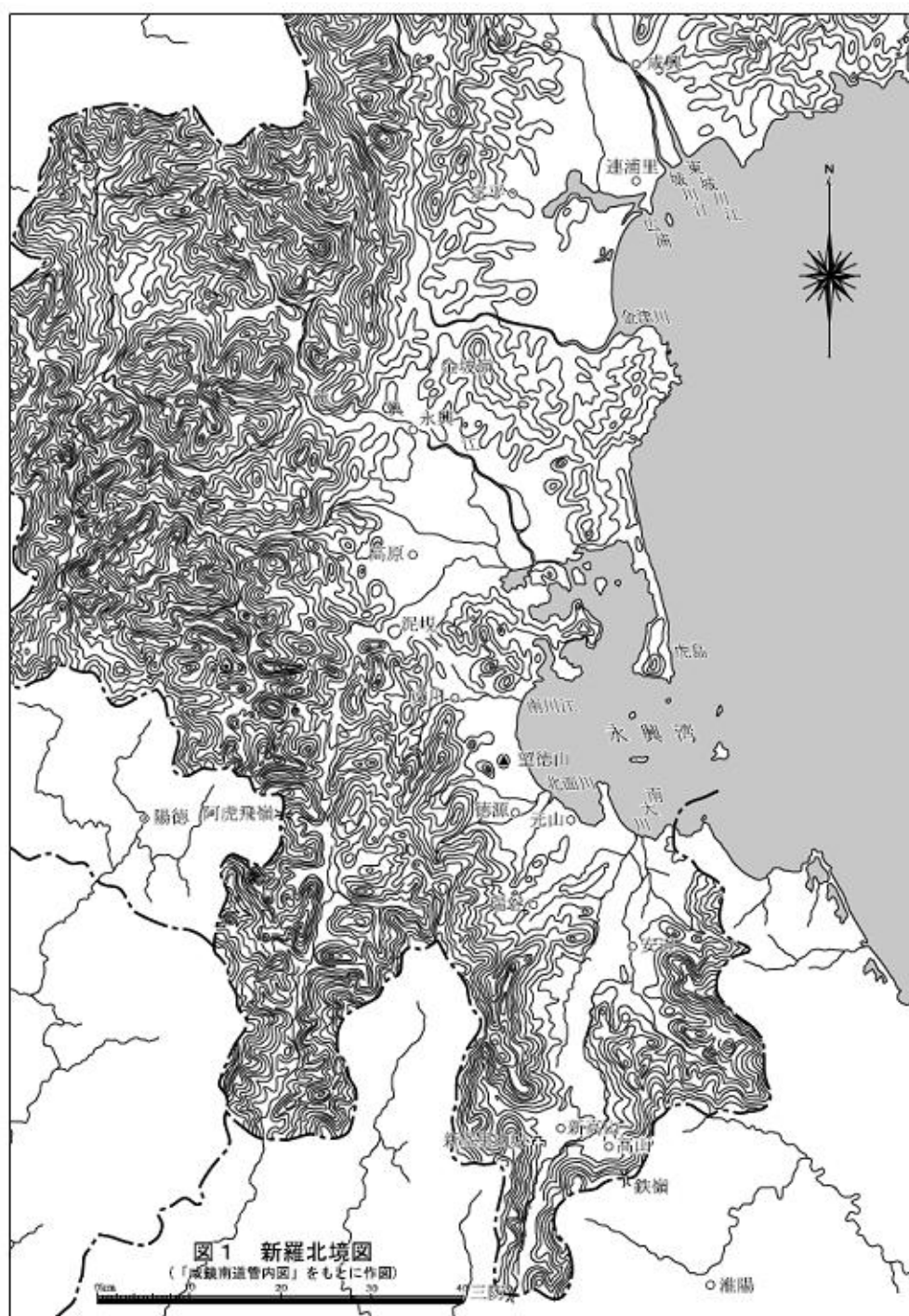
이러한 新羅와 渤海의 境界에 있어서 양국 領域民의 交渉은 確實히 存在하고 있었다고 생각된다. 그 交渉의 담당자인 각각의 領域民 중에 渤海領域民이란 渤海에 의해 遷徙되었던 黑水·鐵利(鐵勒)·達姑(達姑) 등의 北部靺鞨諸族, 新羅領域民이란 濊族이었다. 新羅·渤海兩國의 境界인 泥河附近은 新羅領이면서 渤海支配下의 北部靺鞨諸族의 侵入을 허락하고, 한편에서 渤海가 그들의 自立的活動을 許容하는 緩衝地帶로 評價할 수 있다. 이러한 緩衝地帶에서 頻繁하지는 않아도 양국 領域民이 接觸하고 있었다. 그것이 新羅·渤海接壤地域에 있어서 交渉의 形態였기 때문이다.

55) 「紀聞」에는 「鐵關」으로 보인다. 생각컨대 關門은 如에 보이듯이 「鐵關」(鐵의 門)에 의해 방비되는 것이 많았을 것이다. 後代에 鐵關이라는 地名이 各地에 散見되는 것도 그 때문이라고 생각된다. 炭項關門에는 鐵關이라는 別名은 傳해지지 않지만, 長人記事의 「關門」鐵關을 炭項關門에 比定해도 問題 없다고 생각한다.

56) 註24)池內論文.

小稿에서는 國家레벨의 交渉과는 다른 차원의 交渉의 實相을 언급해 보았다. 생각컨대 한마디로 新羅國家, 渤海國家라고 해도 領域全體에 等質的인 支配나 社會가 展開되었을 리 없을 것이다. 地域에 의해 支配의 형태, 居民의 種族的 樣相, 意識 등은 多樣性を 나타낸다. 邊境인 新羅·渤海接壤地域의 양상은 우리에게 그것을 具體적으로 가르쳐 주는 하나의 實例는 아닐까 생각한다.

<附 録>



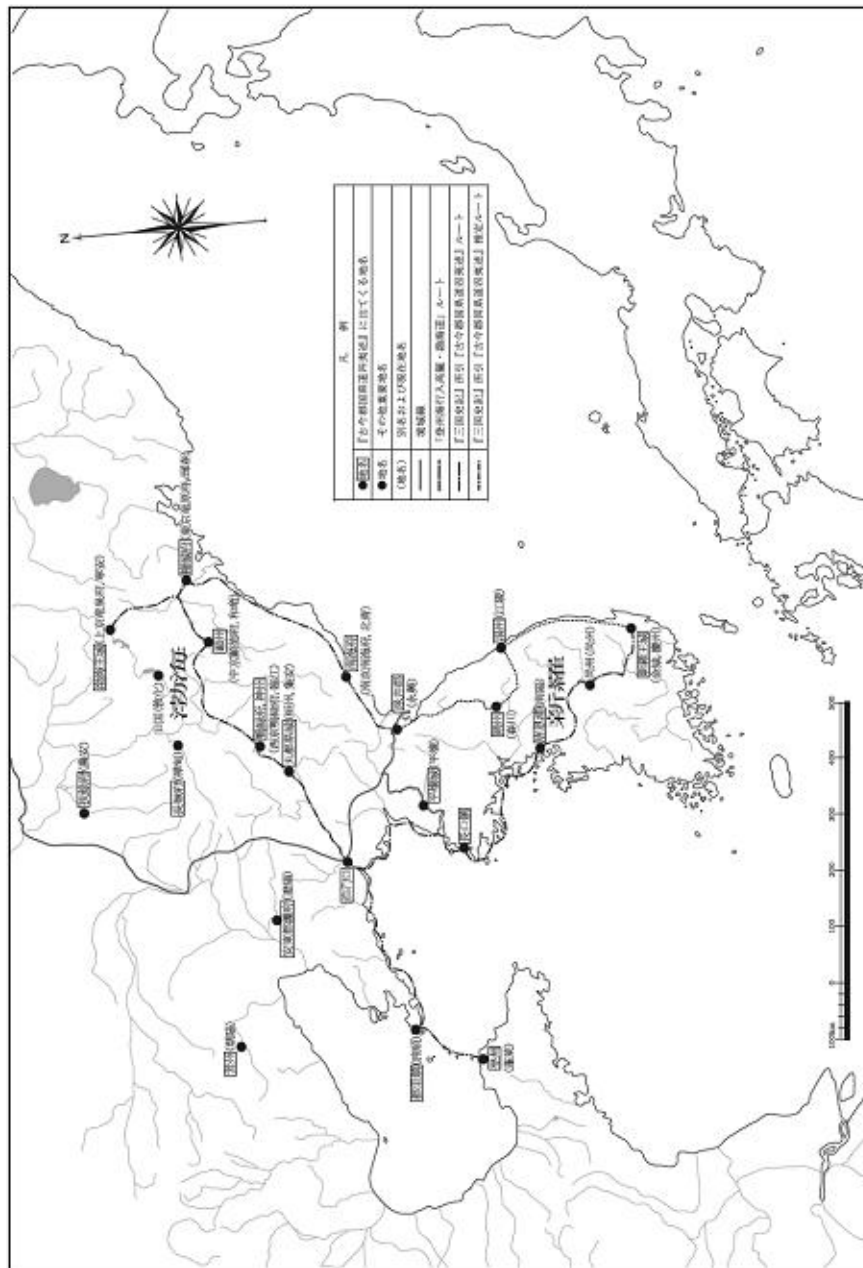


図2 八世紀中葉の東アジアと交通ルート

赤羽目先生の '新羅東北境における新羅と渤海との交渉に関する覺書'에 대한 토론문

토론자 : 구난희

赤羽目 선생님의 연구는 사료 한계로 인한 신라와 발해 외교 과정에 대한 검토가 미약한 가운데, 다양한 시대자료를 망라한 고증을 통해 신라와 발해 간에 이루어진 朝廷이 아닌 다른 레벨의 교류 가능성에 주목함으로써 8~9세기 남북국 관계에 대한 이해를 확대할 수 있다는 기대를 갖게 합니다.

이 논문은 발해와 신라의 교류 현황을 규명하기 위해 신라 동북경의 위치 비정을 검토하고 여기서 행해진 교섭의 형태와 주체를 규명하고 있습니다. 우선 泉井郡-湧州-宜州-德源으로 보는 종래 학설에 대하여 湧州와 宜州가 동일한 시기에 마련된 기록에 공존하고 있다는 사실에 착안하여 의문을 제기하였습니다. 즉 湧州와 宜州는 서로 다른 지역이므로 泉井郡의 위치를 德源으로 볼 수 없다고 지적하고 泉井郡의 위치를 永興과 文川 주변으로 새롭게 제안하였습니다. 더불어 사료에 등장하는 比列忽州-鐵關城-泉井郡 기사를 연계하여 신라의 동북방 영역 확대 과정으로 이해하고 현재의 安邊지역으로부터 永興 일대에 이르는 지역으로 비정하였습니다.

다음으로 이 지역에서 이루어진 발해와 신라간의 타자인식과 양국 영역민의 교섭 형태를 검토하고 있습니다. 하지만 이 지역은 비록 경제상으로는 신라영역이었으나 발해의 수시 접근(침입)이 가능했고 이들 통해 발해와 신라의 교섭이 이루어졌다는 사실에 주목하고 있습니다. 그리고 이 지역의 교류를 담당한 발해 영역민은 북방으로부터 이주한 黑水, 鐵利, 達姑 등 북방말갈계족이며 발해 조정은 이들의 자립적인 활동을 허락하고 있었으므로 신라 영역 내 濊族과의 교류가 가능하였음을 지적하고 있습니다.

이러한 연구는 그동안 조정과 조정간의 교류에 한정하여 간과된 다양한 교류 양상에 대한 가능성을 열어주는 의미있는 작업이라 생각합니다.

본 주제가 토론자의 평소 관심과 다소 거리가 있는 연구분야로 면밀한 토론을 제기할 수 없다는 것에 먼저 양해를 구면서 오늘의 토론은 이해하지 못한 몇 가지 문제들을 제기하는 것으로 가름하고자 합니다.

1. ‘泉井郡≠宜州=德遠’ 인식에 관한 문제

본 논문은 泉井郡-湧州-宜州-德源으로 보고 있는 종래 학설에 대하여 湧州와 宜州가 동일한 시기에 공존하고 있다는 사실을 들어 천정균은 의주지역이 아니라고 보고 위치 비정을 새롭게 모색하고 있습니다. 즉 삼국사기의 편찬시기와 고려사 기록대상 시기가 동일한 시기라는 점을 지적한 것입니다. 그러나 三國史記는 이른바 舊三國史를 바탕으로 저술하였으므로 b의 ‘今湧州’는 구삼국사가 저술된 고려 초의 상황으로 이해할 수 있겠으며, c~f 기록과 마찬가지로 고려 초까지는 湧州였다가 고려 중기 이후 宜州로 개명된 것으로 이해하는 것이 일반적이라 하겠다. 역대 지리지 기록뿐만 아니라 지형적 특성과 교통로로서의 입지조건을 감안하더라도 덕원으로 보는 것이 좀 더 객관적이라는 생각입니다. 고려 이후 조선시대의 지리지까지 일관되게 서술되고 있는 지명 변화를 달리 보고자 하는 또 다른 이유는 없는지 궁금합니다.

2. 長人記事와 북방말갈의 문제

선생님께서 이 지역에서 교류를 수행한 발해영역민을 黑水, 鐵利, 達姑 등 북방말갈계족으로 지적하면서 이들은 발해 조정에 의해 이주된 집단으로 이해하고 있습니다. 종래에도 사료에 등장하는 이들을 북방으로부터 이주해 온 세력으로 보는 견해는 있었으나 독자적인 이주가 아니라 발해에 의해 계획된 ‘遷徙’로 보고자 하는지 그 이유가 궁금합니다.

다음으로 長人기사에 반영된 異形異類觀은 이 시기만의 것이 아니라 삼국시대 및 신라하대에도 지속적으로 제기되고 있었다는 사실에 눈을 돌려 볼 필요가 있다고 생각합니다. 이런 이유로 인해 혹자의 경우는 삼국시대 이래로 한반도에 존재하던 말갈이 8세기 중엽을 전후로 발해에 예속되었다가 9세기 이후 발해의 동치력이 약화되자 다시 독자적으로 활동하는 것으로 이해하기도 하는데 이에 대한 선생님의 의견을 여쭙는지요?

궁극적으로 이는 ‘靺鞨’이라는 집단과 실체들 어떻게 발해와 연계하여 이해할 것인가의 문제와 연관된 것이라 하겠습니다. 한규철 선생님께서 오래 전 제안하신 동북방 오랑캐의 범칭설의 연장에서 한반도 내 말갈 또한 국가체제에 완전히 편입되지 않은 변경 지역의 계층족을 범칭적으로 표현하는 것으로 이해할 수도 있을 것 같다는 생각입니다.

3 신라 동북경계의 양국 교류의 양상

선생님의 논문에서는 이 지역에서 이루어진 양국의 교섭에 관하여 이른바 발해 영역민의 신라 경계 내 침입에 의한 가능성을 언급하면서 다른 한편으로는 이 지역을 '완충지대'로 표현하고 있습니다. 침입이 아닌 다른 형태의 교류가능성을 보고 계시는 것인지 아니면 발해조정과 신라조정간의 대립적 관계를 전제로 상대적으로 충돌이 완화된 지역이라고 이해하고 계시는지 묻고 싶습니다.

마지막으로 이 지역의 교섭은 자립적 활동 허가에 의해 이루어진 것이며 (비록 직접적으로 언급하지는 않았지만) 그것을 발해의 변경 지배 방식의 하나로 있습니다. 그러나 발해의 변경(말갈계족)의 지배 방식은 시기적으로 차이가 있다고 생각합니다. 일찍이 저는 746년 鐵利人 집단의 일본 방문의 사례를 검토하는 가운데 이들을 수령으로 하는 사신단의 진출은 발해의 통합과정이 적극적으로 추진되는 시기와 일치되고 있다는 사실을 확인한 바 있습니다. 그렇다면 이 지역에서의 교류는 어떠한가 궁금합니다. 논문의 앞 부분에서는 신라에 의한 축성 과정을 언급하고 계신데 양국 영역민의 교류는 이 시기와 어떤 상관관계를 갖고 있다고 생각하시는지요?

